

EALAI とは

東アジア・リベラルアーツ・イニシアティブ (East Asia Liberal Arts Initiative, EALAI) は、東アジアにおけるリベラルアーツ教育の共有を目指し、その基盤構築を行なうプロジェクトとして、2005 年に文部科学省の援助を受けた東京大学のプログラムとして発足し、2009 年 4 月からは教養学部附属施設となり、現在は大学院総合文化研究科および教養学部の附属施設となっています。また、東京大学が 1999 年から、北京大学・ソウル国立大学校・ベトナム国家大学ハノイ校と共同で開催してきた「東アジア四大学フォーラム」の本学における実施機関としての役割も担っています。

教養学部においては、駒場の教養教育の国際連携のために、ソウル国立大学校やベトナム国家大学ハノイ校など、東アジアの主要大学との間で E-Lecture や集中セミナーなどによる共同授業を行ない、また、国内外の専門家を招いて、東アジアにおけるさまざまな事象や問題を主題とする講演会やテーマ講義も開催しています。駒場の教養教育のみならず、東京大学にとっても、アジアとの教育交流の重要性はますます増大しており、EALAI はその中核として積極的に活動を続けています。近年は、大学院総合文化研究科における日本・アジア研究の成果還元にも力を入れ、グローバル地域研究機構アジア研究センターとの連携のもとに、東アジアの研究交流にも力を入れています。

近年、東アジアの国々の関係において、政治的に緊張したやりとりが見られることが少なくありません。そしてそれは昨日今日の問題ではなく、東アジアという地域の歴史と深くかかわっています。本年度のテーマ講義は、「東アジアの近代と現代：言語を中心に」として、さまざまな様相を呈する東アジアのことばから、この地域の近代、そして現代について考えました。広い視野で今後の東アジアについて考えるきっかけとなることを願っています。

EALAI 執行委員長 齋藤希史

趣旨説明

今のわたしたちは、何か特定の「言語」を話し、また書いており、その「言語」は世の中に複数あって、「言語」と「言語」の間にははっきりとした違いと境界がある、と当たり前のように考えています。しかし、それはほんとうなのだろうか、というのが、このテーマ講義の根本の問いかけです。

現に、東アジアで使われている漢字は、個別の「言語」を越え、「日本語」「中国語」で使われています。また、主として漢字二字で組み立てられた「漢語」という語彙が、今は漢字を使っていない北朝鮮やベトナムでも、音こそ違え流通している、ということも知られています。このように、個別の「言語」を越えた存在が、今でも確固とした地位を占めているのはなぜなのでしょう。

この問題を考えるためには、むしろ順序を逆転させて、個別の「言語」という存在、というより「観点」が、常に変わらないものではなく、「近代」という状況の下で作られた歴史的なものだ、という見方が必要です。今回の講義では、われわれにとって一見なじみ深い「東アジア」という場において、「言語」がどのように立ち上がってきたのかを考え、そしてその過程で、「言語」と「言語」、「文字」と「文字」との間に浮かんで消えていった何者かを、すくい上げようと試みました。たとえば、「漢文」が「訓読」という現象を通じて「日本語」や「中国語」になっていく間に生じたさまざまな文体や、「漢文」の中で、「漢文」を背景として形成されたいわゆる「新漢語」が、いつの間にか「日本語」や「中国語」のものになっていくプロセスは、今のわれわれの感覚を一旦ゼロにしなければ理解しにくいものです。

幸い、東京大学教養学部には、このような問題系に関心を持ち、異なる時代と地域の状況に通じた専門家がそろっています。2002年度冬学期には、同じ問題意識に基づいたテーマ講義「漢字文化圏の言語と近代」が開講され、その成果は『漢字圏の近代：ことばと国家』（村田雄二郎、C・ラマール編、東京大学出版会、2005年）にまとめられています。今回は、その延長上に立って、さらに細かい地域的・歴史的な偏差に光を当てるべく、前近代のヨーロッパから見た「中国語」、植民地時代の朝鮮と台湾、そして香港という場を特に取り上げました。

この授業のために、ご出講を快諾くださった駒場の先生方と、台湾からわざわざおいでくださった陳培豊先生とにお礼を申し上げます。また、授業の運営とこの報告集の作成のためにお手伝いを頂いた EALAI の伊藤未帆特任講師、齊藤良子特任講師、事務補佐員の岩田以都子さんと、TA の新谷春乃さんにも心からの感謝の意を表します。そして、授業に出席し、コメントペーパーを通じて、時に答えに窮するような鋭い問いかけを投げかけてくれた受講者のみなさんも、この授業の共同制作者であったと思います。ありがとう。

2014年3月26日

岩月 純一

目次

EALAIとは	i	齋藤希史
趣旨説明	ii	岩月純一
講義概要紹介		
「西洋人の漢語研究」	2	
	2013年10月15日	講師:吉川雅之
「漢字圏としての近代日本(1)——英華辞典の奔流」	6	
	2013年10月21日	講師:齋藤希史
「漢字圏としての近代日本(2)——訓読体の普及」	10	
	2013年10月28日	講師:齋藤希史
「地方語・国語・世界語——章炳麟と劉師培の中国語構想」	14	
	2013年11月5日	講師:石井剛
「天・民・文——近代中国のレジティマシー」	18	
	2013年11月11日	講師:石井剛
「『国文』と漢文／漢字、価値観の相克——韓国併合以前」	23	
	2013年11月18日	講師:三ツ井崇
「交錯する言語的近代——コロニアリズムとナショナリズム(植民地期～現代)」	27	
	2013年12月2日	講師:三ツ井崇
「『漢字廃止』とは何か?——ベトナムの経験」	32	
	2013年12月9日	講師:岩月純一
「混ぜない『配合』?—『新漢語』のダイナミクス」	36	
	2013年12月16日	講師:岩月純一
「もう一つの中国か——言語の近代化に於ける選択肢」	41	
	2014年1月15日	講師:吉川雅之
「漢文の坩堝(るつぼ)——重層植民地支配下『台湾国語』が歩んだ道」	46	
	2014年1月20日	講師:陳培豊
まとめと総合討論	51	
	2014年1月27日	講師:岩月純一、陳培豊、三ツ井崇、吉川雅之
編集後記	57	
協力者一覧	58	

西洋人の漢語研究

——漢語は欧文によりどのように記されたか——

吉川雅之(本学総合文化研究科言語情報科学専攻・准教授)

第2回:2013年10月15日

講師紹介

吉川雅之

(よしかわ まさゆき)

東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻・准教授。

専門は中国語学(音韻と文字、文献)、香港・澳門言語研究、東西言語文化交流史研究。東アジア大陸部の諸言語の音韻と文字について、(1)文献資料に基づく通時的研究、(2)野外調査データに基づく共時的研究、を行ってきた。最近是中国南部の非漢語や台湾の諸言語についても考察を試みている。主な著書に『香港粵語』シリーズ(白帝社)、『「読み・書き」から見た香港の転換期:1960~70年代のメディアと社会』(明石書店)が有る。ホームページは <http://www.ac.cyberhome.ne.jp/~hongkong-macao/index.html>。

講義内容

1. ファーストコンタクト—16世紀後半の文献資料

漢字という東アジア文化圏にのみに存在していたものに遭遇したとき、域外の人々はどのようにそれを表現したのであろうか。本講義では東西が最初に接触した16世紀後半以降、中国へ到来した欧米人が漢語(すなわち中国語)の音をどのように文字化したかに焦点を当てる。

カルレッティ(Francesco Carletti)というイタリア商人が記した *Ragionamenti del mio viaggio intorno al mondo* (1606~1609年頃)を見てみると、幾つかの漢字がローマ字で記されている。しかし、声調については何ら文字化はなされていない。

この時代、世界各地へヨーロッパの波が押し寄せていた。カトリック・ミッションの司祭であるリッチ(Matteo Ricci)によって中国語をローマ字で表記する礎が築かれたのもこの時代である。また、メンドーサ(Ioan Gonzalez de Mendoca)が *Historia de las cosas mas notables, ritos y costumbres del Gran Reyno de la China* を記す等、ヨーロッパの人々の中国への関心は高まっていた。

言語資料として有用なものも出現している。Arte de la lengua Chio Chiu というスペインのドミニコ会によってマニラで書かれた閩南語の語彙集がある。すべてローマ字で書かれており、書名の”Chio Chiu”は漢字に転写すると「漳州」(福建南部の都市名)である。当時マニラに在住していた福建系中国人を協力者として記されたものと考えられている。

2. プロテスタント・ミッションが極東への布教を目指す—19世紀初頭

18世紀にはカトリック・ミッションは典礼問

題により、中国から撤退する。それに取って代わる波は 19 世紀初頭に南から大英帝国によってもたらされた。イギリスはゴア、マラッカ、シンガポールを経由し、中国を目指した。当時、清朝は鎖国政策をとっていたが、ポルトガル領の澳門(マカオ)では治外法権であったため、欧米の宣教師は澳門を活動の拠点とした。

マーシュマン(Joshua Marshman)はバプテリスト派の宣教師としてインドへ赴き、現地人子弟の教育に尽力したことで知られている。彼は 19 世紀に最初に中国語を学んだプロテスタント宣教師の一人である。その仕事として、1810 年に『マタイ福音書』を漢訳し刊行、翌 1811 年には『マルコ福音書』を漢訳し刊行した。彼の助手は澳門生まれのアルメニア人ラサールであるが、商売のため出かけたインドで、ブキャンの紹介でマーシュマンと知り合う。ラサールは彼の中国語教師を務め、彼の聖書漢訳を助けた。マーシュマンは 1814 年には中国語の文法書である *Elements of Chinese grammar*(『中國言法』)を発行するが、これが布教上のライバルとして些か微妙な関係にあったモリソン(Robert Morrison)の文法書『通用漢言之法』(1811 年脱稿)との間に剽窃の疑惑と告発を惹起する。マーシュマンの文法書には官話と数ページのみの広東語がローマ字化され表記されている。その表音は英語の綴りに従ったものである。

一方で、モリソンは澳門とマラッカを根拠地とし、多数の書物を出版した。文法書のほかに辞書 *A dictionary of the Chinese language*(1815~1823 年)も刊行している。そこではマーシュマン同様、英語の綴りを

ベースとした表音が行われている。

彼らにとって悩ましい問題は幾つか有り、頭子音の有気・無気をいかに弁別的に表記することはその一つであった。有気音であることをモリソンはアポストロフィーで、マーシュマンは *h* で表そうとしたが、モリソンは官話についてのみそれを行い(広東語では行わなかった)、マーシュマンは広東語に関して多数の誤植を犯した。声調の文字化(すなわち可視化)も難題であった。彼らが接した官話は北京方言ではなく、5 つの声調を持つ南京方言であり、モリソン、マーシュマンともに記号化を試みたが、その手法は次の時代の宣教師には必ずしも継承されなかった。

3. 東南アジアでの翻訳—アヘン戦争前

1818 年にモリソンによって英華書院がマラッカに設立された。同書院は東南アジアにいた華人の子弟を受け入れ、西洋的な教育を授け、同時に中国の文化を学ぶ場として機能した。19 世紀最大の中国学者と呼ばれるレッグ(James Legge)が後に校長となるが、彼が編集した *A lexilogus of the English, Malay, and Chinese languages* は英語、中文(漢文)、マレー語、閩南語、粵語の対照文例集であり、閩南語と粵語はラテン文字のみで表記されている。

この時期になると、大英帝国の拡張から優位性を見出し、漢字に対するラテン文字の優位を主張する欧米人が現れるようになる。

4. ラテン文字表記法のグローバリズム?

1830 年代には、モリソンの事業を受け継いだ宣教師たちが澳門で中国語の研究を

続けた。その中から中国の多くの言語に通用する汎用性の高いローマ字表記の考案が唱えられ、雑誌『Chinese Repository』の中で議論が展開された。その議論の一部は印刷工であったウイリアムズ (Samuel Wells Williams) によって牽引された。最近の研究により、多くの言語に通用するローマ字表記考案の動きは澳門で起こったものではなく、インドから飛び火したことが分かっている。19 世紀初頭になると、インドでは様々な言語に対して、ローマ字表記を統一しようという動きが出てくる。英語式と新造式の 2 つの表記法を巡る論争があり、その議論が澳門に飛び火したのである。表記法を巡る議論がグローバルな展開を呈していたことが窺えよう。

ローマ字表記を決めるにあたり、声調の問題が再燃した。ウイリアムズはローマ字の四隅に圈発を模した記号を付けることで声調を表そうとしたが、活字を作る必要性が生じた。この種の困難はその後も続いている。

1855 年にはレプシウス (Richard Lepsius) が *Standard alphabet for reducing unwritten languages and foreign graphic systems to a uniform orthography in European letters* を著した。そこではアジアやアフリカの様々な無文字言語に対して、ローマ字表記案が示されている。このような多くの言語に対応したローマ字表記は、やがて 19 世紀末になると国際音声記号へとつながっていく。

5. 現地語の表記への対応

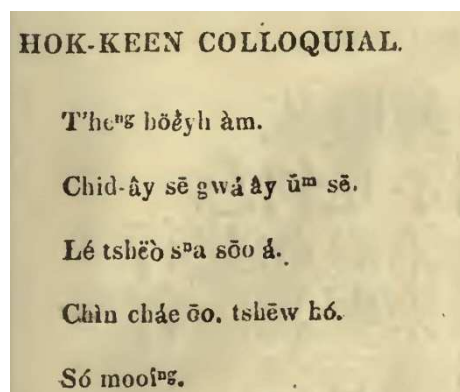
アヘン戦争以降、中国東南部沿岸の開港された都市へ来た宣教師たちは現地の言

語を勉強するようになる。数多くある各地の中国語に対して、ローマ字表記を用い、聖書や辞書、教材を作成した。例えば 1891 年に刊行された蘇州語の『マルコによる福音書』は、蘇州語に対応したローマ字で表記されている。しかしながら、頭子音や母音、声調の数が多いため、ローマ字表記の多くは幾つもの補助記号を必要とした。

中国語以外の言語 (いわゆる少数民族語) についてもローマ字表記が適用されるか、あるいは新たな文字体系が作られるかした。新たな文字体系としては、フレイザー文字というラテン文字をベースとした表記法が知られている。これは、リス語を表記するのに用いられた。

このように、当時は欧米人が自分たちの記号体系であるローマ字を改良して東アジアの言語に適合させようとした時代と言える。

一方で、19 世紀後半に入ると、北京方言が規範言語としての地位を固め、南京方言に取って代わる。北京方言の辞書や教材が多数刊行され、同時にそれに適合したラテン文字表記法としてウェード=ジャイルズ方式が勢力を伸ばした。



6. 後に現代中国・台湾・香港へと続く道

西洋からのローマ字表記の波が世界を巻き込む形で巨大化しつつ、アジアへ到来したのが 19 世紀であったように思われる。現在、台湾語については、漢字で書こうとする動きとローマ字だけで書こうとする動きが併存しているが、台湾語をローマ字で記すことは 19 世紀から続いており、その意味で今回の話の延長上に位置している。また、香港では、近年まで英領であったこともあり、英語の綴りを利用して広東語を

書くというスキルが養われている。これも今回の話と無関係ではない。

20 世紀に入ると、中国人の中から中国語の表音文字化の声が上がるようになる。1930 年代に中国共産党の支配地域で使用された「ラテン化新文字」は、現在の中国語のローマ字表記「拼音(ピンイン)」を作る上で参照された。中華人民共和国の文字政策も、実は 19 世紀の歴史とつながっているのである。

<コメントペーパー>

インドや中国の発音を西洋人に分かりやすくするために考え出されたものが、進化して国際音声記号になったのだと考えると、中国の言語というのも現代の我々に恩恵があったのだなあと思った。(文 I・1 年)

何の手がかりもない状態で中国語を習得し、神の教えを広めるというミッションには非常な困難が伴っただろうと想像できました。その中で、声調の違いや無気音・有気音の区別をどのように表記するかをめぐって、試行錯誤した宣教師や学者たちの苦労を思い浮かべると大変興味をそそられました。(文 II・1 年)

英語の孤立語化や朝鮮韓国語の漢字・ハングル混交表記の推進運動など、グローバリゼーションの中で各言語が他の言語と影響し合っただけで変容しているような話を時々聞きます。中国語のラテン文字化もそうした事と関連がありそうで面白かったです。(文 III・1 年)

大英帝国の覇権とともに漢字への考え方が変化していく辺りが、文字と人の思考とのつながりを如実に表しているようで、慣れると自在に扱えると考えてしまうような言語であっても、人間の思考や行動に影響を与えうるのかもしれないと感じた。(文 III・1 年)

漢字圏としての近代日本(1)

——英華辞典の奔流——

齋藤希史(本学総合文化研究科 超域文化科学専攻)

第3回: 2013年10月21日

講師紹介

齋藤希史

(さいとう まれし)

東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻・教授。

専門は、中国古典文学、近代東アジアの言語・文学・出版。



主要著書に、『漢文脈の近代 清末＝明治の文学圏』(名古屋大学出版会)、『漢文脈と近代日本 もう一つのことばの世界』(日本放送出版協会)、『漢文スタイル』(羽鳥書店)、『漢詩の扉』(角川書店)など。

講義内容

1. 蘭学の文体

0) 普遍性、透明性、均質性への志向

日本の、あるいは東アジアの近代とは何だろうか。それは単純な西欧化ではない。近代を、すべてに通底する原理としてとらえ、それがそれぞれの地域で具現化する際に、その地域の歴史や社会によって、さまざまな形態をとり得ると想定してみよう。たとえば西暦と年号の問題。年号による紀年しかないところでは、年号ごとに紀年はリセットされる。年号の順番を覚えていなければ、長い時代を把握することはできない。その場合の歴史認識、時間感覚は現

在の我々とは異なっていたはずである。そこに西暦が入ってきたとき、それはキリスト教暦としてというよりも、一つの数字によって古代から現代までを貫く、世界を「透明化」するための有効なツールとして機能した。こうした普遍性、透明性、均質性への志向を「近代」という時代の特徴として捉えてみれば(その反作用として喚起される固有性への指向も内包される)、西暦は、単純な西欧化ではないことがわかる。換算可能なスケールとして西暦が導入されたために、地域の固有性としての年号を維持することも可能になった。こうした西暦と年号の併存は、日本における近代の一つの形態である。

a) 蘭和辞書

今回のテーマ講義では、漢字世界の近代と題して、翻訳と訓読体について取り扱う。

近代日本における翻訳の問題について考えてみると、井上哲次郎や西周によって作られた新漢語が、東アジア全体に広がったという話はみなさんも知っているかもしれない。しかし実際にはそう単純な話ではない。

さかのぼれば、日本における最初の翻訳は漢文から日本語への翻訳であった。それは訓読、すなわち文字を介した翻訳であり、漢字の外に出るものではなく、厳密に言えば、翻訳とは言いにくいものだった。中国では、仏典、すなわちサンスクリットからの翻訳があった。西域

の僧侶が西域語のわかる中国人に通訳させ、さらに別の書記が文章として整えていくという何重もの翻訳の過程を経て漢訳仏典ができ上がった。それが可能であったのは「その言葉話す人がいた」からである。これに対して日本では、漢文＝文字情報を読み解くことが主となった。ただし例外として、琉球や長崎には通事と呼ばれる人が存在した。これは、彼らの身体を通して、文字を介在させず自分の体を変換機能にして行う「通訳」である（「翻訳」は文章、「通訳」は口頭という使い分けをするのは日本語において特徴的な事象である）。

十八世紀から行われたヨーロッパ語から日本語への翻訳は、漢字を媒介としないという意味で、訓読とは異なっていた。その時期の翻訳は、最初はオランダ語からのものであった。『蘭学事始』にあるように、彼らは漢字以外の、辞書がない文字としてのオランダ語を手探りで翻訳していった。ヨーロッパの情報は、漢訳洋書という形でも流入していたが、それを読むのとはまったく異なる経験をしたのである。

日本人によってなされた最初の本格的な翻訳と言ってよい『解体新書』は、じつは漢文で書かれている。その大きな理由として伝えられるのは、蘭方医たちが、漢方医たちの考え方を改めさせようとしたからということであった。彼らは漢文で書くことによって、内容を中国へ還流させ、彼らの考えを改めることを期待した。そのために、彼らの世界における普遍言語としての漢文を利用したのである。

蘭学が広まるにつれて、その翻訳文体は、漢文ではなく漢字仮名交じり文へと変化していった。『厚生新編』（幕府で翻訳された百科事典）や『輿地誌略』（地理書）が例として挙げられる。そして蘭和辞書も編纂された。



ここで、桂川甫周の『和蘭字彙』を明治期の翻訳と比べてみよう。この中に登場する **De gewoonte is eene tweede natuur.**「仕癖は二番目の性質なり」は、現在なら「習慣は第二の性質だ」と訳すところだろう。「仕癖」は漢字表記ではあるが漢語ではない。興味深いことに、この文章は、「習與性成」（『尚書』太甲上）や「習慣若自然也」（『孔子家語』七十二弟子解）などをただちに想起させる。つまり、「仕癖」ではなく「習慣」という語を使ってもよかったのだ。しかし彼らはそうしなかった。つまり、日本近世の書き言葉には、漢文脈が強い文体とそうではない文体があり、後者によって初期の翻訳がなされていたことがわかる。これに対し、明治時代の翻訳は漢文脈が強い文体、すなわち近代文語文で翻訳されている。この間に何があったのか。



b) 翻訳小説

日本で最初の『ロビンソンクルーソー』はオランダ語からの翻訳であった。一見すると漢文脈の強い文章に見える。しかし、自筆校本を見ると、「渡に船なきごとく」から「暗路に燭の滅する如し」という書き換えの作業が行われたことがわかるように、ベースとしては近世の日常文章を基盤とし、実際に文章を整えていく過程で、漢文脈が強まったということがわかる。こうした書き換え作業に関して、福沢諭吉は、学者たちが、文章として漢文らしく修辭されていないと権威がないと考えたからだと思なした。福沢諭吉は、漢文脈の修辭を使わない文章のほうがよいと考え、近世日本に流通していた日本語の漢字表記を積極的に利用した。

福沢は、翻訳の文体として、1. 漢文の間に日本語を入れる(訓読体)、2. 候文から「候」を外して整えるという二つの方法があるとし、2番目の方法を採用した。それはローカルな日本語には近かったが、明治期の他の知識人よりも、中国語への翻訳は遅れた。

2.再編成される漢文脈

a) 英華辞典の奔流

オランダ語が流入してきたとき、蘭華辞典は存在せず、そのために日本で蘭和辞書が編まれた(ベースとなったのは蘭仏辞典である)。しかし、英語に関しては、主に宣教師による英華辞典が先行していた。これらの辞書の特徴は、訳語の漢語が、古典語から俗語、方言まで、区別なく置かれていることにある。ことばには階層性があるが、ここではそれまでの漢語の秩序が維持されず、むしろ破壊されるという事態が生じた。英語に対応する漢語として、すべてがフラットになって可視化されたのであった。

蘭学から英学への転換は、じつは、こうした

漢語秩序の破壊を後押ししたのであった。幕末明治の知識人たちが翻訳に大量の漢語を用いたのは、単に漢文脈的な修辭を重んじたのではない。閉じられた古典的な漢語世界が、英華辞典という翻訳によって、一気に開かれたことが大きい。極端に言えば、その漢語は、対応すべき英語と等価でありさえすれば、古典の中の秩序とは関係なく用いてかまわない。その漢語がそれまでどのように使われてきたかということよりも、対応する英語が何かということが重要だ。英語によって再編された新しい秩序の中で、新漢語をいくらでも生み出すことが可能となったのである。

b) 学び直される漢文

『哲学字彙』の序文を見てみると、中国で権威ある出典を使ったと言っているが、必ずしも、出典を尊重しているわけではない。たとえば *coexistence* を「俱有」と訳し、仏典や杜甫の詩を引いているが、それらに使われている意味とはじつは関係がない。経典の文字を使ったと言いつつ、その意味とは別に、文字として借りているだけなのである。古典ではなく英語を中心に行っているという意味において、訳語としての漢語に変化していった。これは古典語を尊重しているように見えて、実際には古典語の破壊である。

そうした中で、*Habit is second nature* の訳として「習慣ハ第二ノ天性」が登場する(『西国立志編』)。これはすでに英華辞典に同様の訳文があり、『西国立志編』を訳した中村正直は、中国の古典と英華辞典の両方を知っていた。つまり、それは「仕癖は二番目の性質なり」を漢文的に修辭したというだけではなく、英華辞典による翻訳漢語の世界も背景にしているのである。そして、明治以降の人々にとって、「習慣ハ第二ノ天性」という語は、何よりもまず『西

国立志編』の世界を想起させるものとなった。

『哲学字彙』の序文のなかに、英文と等価なもの、同じもの(equivalents)を日本語として見出すことが我々の作業なのだという書き方がある。これもまた、古典を中心とする漢語世界ではなく、英語の等価物としての漢語になっていたことを示している。

また、中村正直による明治13年の東京大学の授業報告の中に、「平日ソノ読メル英書ヨリ一章ヲ抽キ出し、漢文ヲ以テ翻訳ナサシメタリ。」という一文がある。この場合の漢文とは、古典語としての漢文ではなく、普遍的な英語に対応するものとしての普遍的な漢文であった。

かつて『解体新書』が漢訳された際、その場合の漢文とは、中国を念頭に置いたものであった。普遍性は意識されておらず、蘭方・蘭学を広めるためのツールとしての漢文が必要であるという意識があった。これに対し、中村正

直が翻訳させた漢文とは、英語の普遍性と等価物としての普遍的な漢語が想定されていた。彼らにとって、漢語とは、新しく作るべき人間的な普遍言語という意識があったのかもしれない。同様に、中江兆民がルソーの社会契約論を漢訳した『民約訳解』も、この流れに位置づけられよう。

これらは、旧来の漢文脈を離れ、英語やヨーロッパ語、ヨーロッパ文明に等価なものとしての漢語である。古典的な秩序が崩れ、漢語の空間が均質化し、道具としてどのようにでも使えるようになった。その物差しとなったのが英華辞典である(ここに冒頭に話した西暦とのアナロジーを見ることがもできる)。漢訳語と古典語が混交し、新漢語の空間が創り上げられた。それが近代文体の形成につながっていった。

<コメントペーパー>

江戸時代の知識人にとって「日本語」はローカルな言語として自覚されており、それはオランダ語の翻訳に漢語的な修辭が多用されていることからわかる。しかし、その古典的漢語を中心に据えた世界も西洋世界との関わりの中で、英語、オランダ語に普遍的価値が認められるようになり、その枠組みも崩されていった。以上のような日本語の動きを生み出す原動力となった英華辞典の存在感は大きいようだ。(文I・2年)

好意的にみるとするならば、新たな語彙と多く取り込んで進化する際の劇的な変化は、知識人らが意識的に引き起こしたものではなく、新たな言語と接するとき、便宜的にとった手段によるものであるということが、言語が人の道具でありながら、人間の行為を起因としているにせよ、独自の動き、制御することのできない動きを持っているように見えた。(文I・2年)

漢字圏としての近代日本(2)

——訓読体の普及——

齋藤希史(本学総合文化研究科超域文化科学専攻・教授)

第4回:2013年10月28日

講師紹介

齋藤希史

(さいとう まれし)

東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻・教授。

専門は、中国古典文学、近代東アジアの言語・文学・出版。



主要著書に、『漢文脈の近代 清末＝明治の文学圏』(名古屋大学出版会)、『漢文脈と近代日本 もう一つのことばの世界』(日本放送出版協会)、『漢文スタイル』(羽鳥書店)、『漢詩の扉』(角川書店)など。

講義内容

0. 前回のコメントペーパーへの応答

コメントペーパーをもとに、福沢諭吉について補足する。福沢諭吉に関しては、自らの叙述生活を振り返った「福沢全集緒言」を参考にするのがよい。福沢の文章の読みやすさは明治期に定評があった。この「緒言」には、翻訳をする上で、難しい訳語を用いないこと、漢文崩し、候字を取り除く、漢字を使用することの便や、漢文秩序の破壊が述べられている。ただし、これは英華事典でも同様である。

当時の英華辞典は、言葉そのものを英語の訳語として使うために作られており、出典

が付記されていない。それに対し、前近代の漢語の語彙集は、基本的に作詩作文用に作られているため、出典を記載することが多い。ただしそれは、語彙の起源を探るものではない。

例えば、『哲学字彙』では使用した書物の中に『佩文韻府』がある。『大漢和辞典』もこの書物を採用語彙のベースとしており、いわば近代漢語辞書の種本になっている。これは作詩を念頭においた書物で、語彙は韻の順に並んでいて、出典も列挙される。つまり英華辞典とは編纂の原理が異なっている。近代辞書の成立過程は、旧来の辞書の言葉の配置が変わっていく過程でもある。

福沢は、自身が漢文の秩序を破壊したことを強調しているが、じつは、前回も『哲学字彙』について述べたように、福沢諭吉が言及するほど、独特な方法ではない。近代日本初期に普遍的に行われてきたことである。ただし、井上哲次郎は西洋世界の等価性・通訳可能性に重きを置いたのに対し、福沢は日本語としてのわかりやすさに重きを置いたという点で大きな違いがある。

1. 今体文・近体文・普通文

明治期の文章の具体例を見ながら、どのようなものであったか考えよう。まず、明治13年初版の『小学読本 近体文』。こうした漢字片仮名交りの文体は、当時は漢文と対置し

て近体文と呼ばれ、後に普通文と呼ばれるようになった。

「近体」は「今体」とも書かれ、要するに現代的ということである。たとえば唐代以降に格律が整備された詩を近体詩と呼ぶが、それ以前を古詩とするからそういう名称になる。あるいは、明治十五年に出版された『新体詩抄』を思い浮かべてもよい。集められた詩は七五調の新しい形であり、イギリスの詩の翻訳や創作詩からなる。当時、詩と言えば漢詩を指し、和歌のことは歌と呼んだ。新体詩は七五調ではあるが、和歌とは異なって漢語をふんだんに用いる。そしてこれが近代日本の軍歌や校歌へと連なる。

言葉のあり方が明治前半に大きく変わり、新しいものが様々に作られた。そのうちの一つが近体文だったのである。近体文の中には、「政府」「事項」「法令」「社会」「主義」等、新しく作られた漢語が多数出てくる。漢語を語幹としたサ変動詞も多い。近代の実用文と言える。



一方で、日本には古くから別の実用文、いわゆる通俗文が存在してきた。その例として明治 9 年刊の『通俗文章』を見よう。中世以来、日本では読み書きのテキストとしては往来物という書簡文集が基本であった。この本はその流れを汲み、本文は候文の書簡

が例文として並び、さらに証書類の例文が並んでいる。実用の文章という点では、書簡と証文が何よりも重要だったからである。日常生活の中での実用性を持つものが、通俗文の基本であった。こうした通俗文は、きまった言い回しを使うことが多い。

近体文との違いは、文体だけではない。近体文は漢字と片仮名で活字に近い書体で書かれている。通俗文は御家流と呼ばれる筆で書かれた崩し字で書かれる。

近体文は、便宜的、実用的なものとして発生した。新しく生み出される漢語は、候文や和文に入れるよりも、漢字片仮名交りの訓読体である近体文のほうがなじみやすい。また、文法が簡略化されており、敬語や待遇表現もない。翻訳文体としても、候文や和文で翻訳するより原語との対照がしやすい。

和文の特色は待遇表現にある。和文で書かれる書簡文にも待遇表現が必要である。人間関係の中で言葉がやり取りされるのが和文だとも言える。訓読体は日本語を簡略化して、大量の情報に対応したものであった。ある事実があつて、それを説明し、非情緒的な印象を与えるのが訓読体の傾向である。

訓読体は、情報を載せる文体として、メディアで多く用いられた。また、教育の文体として、教科書に用いられた。さらに、法律の文体、天皇のことばもそうである。五箇条の御誓文、教育勅語も訓読体で書かれた。

なお、詔勅は、以前は宣命体の例外を除けば、天皇の言葉は漢文体であった。ただし、江戸時代は天皇の詔勅は多くなかった。孝明天皇以降は、漢文の詔勅が増えていくが、漢文で書くには手間がかかる。明治以降、おそらく詔勅を大量に出す必要性もあつて、漢文が減り、漢字片仮名交りの訓読体

へと移行した。幕府の文書は、候文が基本であり、明治になっても届出などは候文で書かれたが、一般の法令は漢字片仮名交りとなった。

2. 漢文世界からの離脱

中華世界からの離脱は、漢文からの離脱を意味する。近体文の成立や新しい漢語の誕生は、それを促進した。だが、それだけではない側面があった。近代になって盛んになった東アジアの交通の中で、漢文が再び浮上したのである。渡航者は筆談を通して交流し、共通言語として漢文が利用可能という実感が持たれるようになる。文明開化的な欧化政策に対して反発する側の人々から、アジアへの志向が出てくる。そういう人たちが漢文を拠り所とするようになった。



このようなことは、近世以前の漢文では考えにくかった。普遍的言語として漢文を認識していたからだ。近世以降、対西洋が念頭に置かれ、普遍的世界として東アジアが存在しているわけではないと考えられるようになる。常に西洋の影が存在する中で、漢文がアジア地域の共通書記言語としての意味をもつようになる。

訓読体が広がりを見せる中、漢文の意味合いが刷新されていった。近体文に取り込

まれた大量の新漢語が、中国の文章にも還流していく。日本に亡命した梁啓超などは、それを積極的に行った知識人である。普遍的なもの、それを西洋的と見なすアジア的なものが常に拮抗していた。

3. 近代日本の書記文体

漢字片仮名交りの近体文は、しばらく書記文体の中心として用いられたが、次第に言文一致体にその座を譲るようになる。ただ、書記文体としての言文一致体は、近体文というベースがあって初めて成立したものである。その意味では、私たちの今の書きことばはなお近体文の延長上にあると言えるかもしれない。

その一つの例として、いわゆるカタカナ語の使用が挙げられる。鈴木孝夫が言うように、カタカナ語は、たとえば「ニーズ」が *needs* の訳語というよりも「需要」や「要求」や「希望」の代替語であるように、「漢字語の総括的代用品」(『日本語と外国語』岩波新書、1990)として普及した面が強い。漢語と同様にしばしばサ変動詞化して用いられることもよく指摘される。つまり、現代文にどうしてもカタカナ語が多くなってしまうのは、新漢語を載せる文体として近体文が急速に発展し、その延長として現代文があるためだとも言える。近代日本の文体は、その成り立ちからして新しい語を取り込みやすくできている。

日本の現代文は、漢字と平仮名を中心として、そこに片仮名を混ぜて使う。片仮名で書けば、それが一つの語であることがすぐに察知され、意味がはっきりしなくても、何かの概念を表しているはずの語として浮かび上がりやすい。つまり、新語として、明治期の新漢語以上に、導入しやすい仕組みとなっ

ている。しかも、その「何かの概念」が、その語そのものではなくて、それが由来する別の言語にあると考えられてしまうことだ。

その意味で、それがカタカナで書かれていることは大きい。漢字語の代用品に止まらない意味がある。近代日本に登場した翻訳漢語は、いまでは翻訳語であることに気づかれずに使われていることも多い。しかしカタカナ語は、少なくともいまのところは、その背後に別の言語世界があることを、カタカナで

書かれている限り示しているということになる。

カタカナ語の氾濫が非難されるのは、それが日本語の世界を崩しかねないと思われるからだろう。しかし、近代日本の書記文体は、複数の言語世界(たとえば和漢洋)の資源を利用し、編み直すことで成立している。その特質を前提とした上で、これからの日本の文体を考える必要があるのではないか。

<コメントペーパー>

近代という世界は西欧列強に対抗するという意味で、前近代的な漢文は排除されていると思っていたが、逆にそれを利用してアジア圏の一体化を図っていたのは興味深い。(文Ⅱ・3年)

明治の文明開化の中で、知識人の間では東アジア世界が相対化され、漢文から稀代文が「日本語」として認識されるようになった。その明治時代から現代にいたる過程で、漢語と西洋語(英語)の間で激しく動いてきた結果、今のような日本語ができてきた。このように今の日本語を考察するとき、文明開化が大きな存在感を持っていることがわかるが、これからの日本語を考えるとき、現在のネット普及に伴う日常言語(会話言語)の拡大というものが大きく取り上げられるのではないかと考えた。(文Ⅰ・2年)

国内の民衆の教養の格差、言い換えれば、庶民と知識人の教養差が、日常生活と学術世界の差を生み出していて、その差が生活に密着した通俗文と学問の世界で長年堅持されてきた漢文、そしてそこから生まれた近体文の差につながっていくことを考えれば、両者が相容れない存在であり、知識人がそれを統一しようとして苦慮したのも当然だなと思いました。(文Ⅰ・1年)

『佩文韻府』の並び順に関して興味をもった。『百科全書』等より以前の欧州の事典などの並びは、宗教的価値観に基づくものであったのと比べると、近代の実用的な配列とは異なる前近代のものとして、西洋と東洋の根本的な違いはこのようなところにもあったように思う。(理Ⅰ・1年)

地方語・国語・世界語

——章炳麟と劉師培の中国語構想——

石井剛(本学総合文化研究科地域文化研究専攻・准教授)

第5回:2013年11月5日

講師紹介

石井剛

(いしい つよし)

東京大学大学院
総合文化研究科
地域文化研究専攻
・准教授。

専門は中国思想
史・哲学。特に近



代が中心。最近では明治後期の思想状況についても考察を行っている。著書に、『戴震と中国近代哲学漢学から哲学へ』(知泉書館、2014年)、『敢問“天籟”: 中文哲学論集』(UTCP、2013年、中国語)がある。

講義内容

0. はじめに

国民国家が形成される中、ある地方語が国語となる。その一方で20世紀初頭、帝国主義や植民地支配の展開に伴い、ユートピア的発想を持ったコスモポリタニズムが興隆し、世界語という概念が登場する。今回は、章炳麟と劉師培の中国語構想を扱う。次回は、前近代から近代へと移行する中で、近代中国の国家としてのレジティマシー(合法性)という観点から考える。本講義が目指すものは二点ある。第一に、言語と政治の関係を中国の近代国家建設から考えることである。中国の近代国家建設は革命であり、言語改革

と同時に進行した。ネイションの内面性を求める、つまりナショナリズムは、革命を推進する主観的エネルギーとなった。一方で、革命家はコスモポリタニズムも模索した。第二に、音声と文字の関係を考えることである。音声がない言語はあるのかという問いや、「エクリチュール」(書かれた言語)の持つ意味、エクリチュールの「パフォーマンスティヴィティ」(何らかの行為を人に命じる言語)の持つ意味を考えることは、中国文明と密接に関係する。

1. 中国近代革命の展開

中国近代革命とは、北方少数民族満洲人が打ち立てた清朝を覆し、漢人による国民国家を形成することであった。その理由は、清朝が近代という大きな力への対抗力を失ってしまったという普遍的な理由と、ナショナリズムという中国固有の理由であった。このナショナリズムの勃興の中で、言文一致運動が興った。ここでは、梁啓超と劉師培の活動を紹介する。

最初に、体制改革と啓蒙思想という観点から、梁啓超を取り上げる。彼は日本への亡命中に、報刊(新聞・雑誌)を通して様々な言論活動を行った。日本における諸分野の新学説を翻訳して中国や韓国へ紹介し、西洋由来の諸概念を中国語へ導入した。その後、清代の学説を整理する作業の中で、自

らを清代の歴史の中に位置づけて評価した。その著書『清代學術概論』では、飾り立てた「文」である桐城派の古文を好まず、質素な「質」である漢末・魏・晋のものを好み、新文体と呼ばれる俗語や韻語を交えた文章を用いたことが述べられている。宋代の終わりから通俗文学の中で、白話は清末に白話文運動として発展した。梁啓超も政治小説である『新小説』を白話形式で執筆し、中国国民への啓蒙活動を展開した。

次に、劉師培を取り上げる。彼は科挙試験失敗後に革命活動へ転じ、革命イデオログの中心的存在として白話を用いて活発な言論活動を展開した。彼は『白話報と中国の前途の關係を論ず』という文章の中で、言葉と文字が一致する歴史を論じ、ダンテを例示しつつ、ナショナリズムと白話・俗語との關係について言及している。劉師培の言語文字論の特徴をことば（音声言語）と文字（書記言語）の面から整理すると、①進化論を取り入れた通時的言語観、②言語の起源を音声に求める、③音声から文字へ、④ディスコースは韻文から散文に進化、⑤近代には言文一致が進むために白話の普及は進化の法則にかなう、といった書記言語に対する音声言語の優位性が挙げられる。漢字は形、音、義といった三要素で構成されるため、音声要素を持つと言える。日本の言文一致運動について論じた柄谷行人は『エクリチュールとナショナリズム』という評論の中で、言文一致運動は世界各国のネーション形成に際して生じる、普遍的な問題であると言う。帝国から離脱し、国民国家を形成する際に地方語が国家語になる。中国の場合は、漢文という自分たちのものを扱うという点で、ねじれが生じた。

この中で、漢字の後進性に対する言論が白鳥庫吉によって提起される。『文字の優勝劣敗』では、漢字は符号文字でしかなく、後進性の表れであり、滅びる運命にあると言う。このような考え方は、現在も哲学者ドゥルーズ＝ガダリの東洋観にもみられる。漢字の後進性という白鳥の考え方は、劉師培の言語観にも通ずるところがある。



2. 民族革命から世界構成へ

世界全体でユートピアニズムが勃興する中、中国では「大同」思想が注目され、アナキズムが取り入れられ、エスペラントの議論が興った。

劉師培は社会主義に傾倒する以前、中国の「大同」思想に傾倒し、他者と我との主体性が通じ合うという「大同」の必要性を論じた。近代国家が成立する以前に、近代国家成立以後に生じるであろう問題の解決方法を提示したという点で先駆的と言ってよいだろう。「大同」とは、天地を共有する上で、皆に対して同じように接し、他者と我が通じ合う世界を志向したものであり、『礼記』にも記されている。もともとは、梁啓超の師匠である康有為が取り上げた概念であり、このようなユートピアニズムは、中国社会を動かす原動力とされた。

劉師培はエスペラント(世界語)へ接近する。1907年から社会主義講習会に参加し、アナキストらとの交流を持ち、翌年からは大杉栄が指導するエスペラント講習会に参加した。

3. 差異の尊重か、同一性の平和か

体制を構築する際に、差異を尊重する立場と同一性を重んじる立場がある。差異を尊重することは、多様性の尊重へつながるが、そこにはコンフリクトが付きまとう。そうすると調和を目指す動きになるが、調和は同一性と言えるか。同一性は平和につながるのか。このようなせめぎ合いは、言語論とも密接に関わる。中国では、章炳麟を中心として方言収集が進められた。それは中国における言語の多様性の尊重という側面を持つ。一方で、多様な読み方が可能である漢字からネイションを想起することは難しい。国民が文字を理解できるよう、表記の簡略化と統一化が進められる。

劉師培は、言語は何らかの共通したメカニズムによって発せられているという唐代以降の音韻論を元に、音韻構造の体系化を目指した。そこでそれぞれ異なる方言にも共通性があると考えた。中国語方言の音声差は、地域差、または異民族流入による混乱が原因と考えられた。そこで中国各地の方言を採取し、中国語が持っている統一性と純血性を取り戻そうとした。



この方言採取には盟友である章炳麟が大きく関与している。章炳麟をはじめとした当時の中国人ナショナリストたちは、漢人由来の民族衣装が日本で呉服という名で残されていることに着目し、呉服を好んで着ていた。章炳麟は言語学者であると同時に哲学者でもあった。孫文と並べ称される革命指導者で、『民報』を通してイデオロギーの宣伝を行った。章炳麟は劉師培と異なり、白話文体を拒否し、弟子の魯迅が「意味も分からない」と言うほどの難解な文章を戦略的に用いた。梁啓超が日本の哲学を普及するために平易な文章を用いたのに対し、章炳麟は日本哲学を骨肉化し、難しい言葉を使うことで、外来の新しい思想を受け入れてもらおうと考えた。また、当時使用されていた漢字数だけでは新しい概念を表現できないため、古い文字を使用した。

方言の差異について、「変わっていった」と考えることはどこかに起源があることを意味しており、同時多発的にことばが生じたという考えとは異なる。このような考え方は、柳田国男の「方言圏論」と類似している。章炳麟は、劉師培の方言音転化仮説に則って、中心から周辺へとことばが広がっていったとする中国語音声相関仮説を完成させた。このように章炳麟と劉師培は盟友でありながら

も、異なる思考を持っていた。このことは章炳麟の文字論からも読み取れる。章炳麟は、文字は音声とは異なる独特の価値を持つと主張する。文字は必ずしも音声に訴える必要はなく、句読点がない文章は文字特有の価値を持つ文章であるとして、文字を話し言葉の代替物として扱わなかった。また、エスペラントに対する批判も展開している。音は全て同じではなく、人間が発する言語音声と

しての音はそれぞれそのままにすればよく、エスペラントのように統一することは間違っていると主張した。大同的なユートピア発想とは異なり、万物がそれぞれの価値を発揮すればよいという考えであった。これは荘子の「齊物論」的発想であった。

<コメントペーパー>

国民国家成立には政治的圧力が必要だということはなんとなく分かっていたが、そこで言語哲学や言語のとらえ方が関係していくという経緯があったことに驚いた。(文 III・1 年)

言語が様々な思想の潮流となっているのを鑑みると、広大な国土を持つ中国にとって言語の統一や秩序だてが政治的に大きな意味を持つというのも納得できる。(文 I・2 年)

章炳麟の中国語音声相関仮説などに見られる考え方では統一言語の存在が国民国家の領域を確定する作用を持つようです。この視点が今日の講義で印象的でした。(文 I・2 年)

ナショナリズムと言語の密接な関係についてこれまで何度も聞いたことがあったが、その際の言語に生じる問題—音声と文字の関係など—についてあまり深く考えたことがなかったので、当時の知識人たちが各々どのような立場に立ってこれに取り組もうとしていたのかを知ることができて非常に興味深かった。(理 I・1 年)

天・民・文

——近代中国のレジティマシー——

石井剛(本学総合文化研究科地域文化研究専攻・准教授)

第6回:2013年11月11日

講師紹介

石井剛

(いしい つよし)

東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻・准教授。

専門は中国思想史・哲学。特に近

代が中心。最近は明治後期の思想状況についても考察を行っている。著書に、『戴震と中国近代哲学漢学から哲学へ』(知泉書館、2014年)、『敢問“天籟”: 中文哲学论集』(UTCP、2013年、中国語)がある。



講義内容

0. 前回のコメントペーパーから

コメント①:「広大な国土を持つ中国にとって、言語の統一や秩序だてが政治的に大きな意味を持つというのも納得できる」

回答①: 中国の国土はいつ決まったのか。辛亥革命では漢民族中心のナショナリズムを原動力として、満洲人が支配している帝国を覆そうとした。しかし清帝国はそもそも満洲人だけの国家ではなかった。新疆ウイグル、ベトナム、ミャンマーなど、中国の朝貢体制の中で、支配関係はグラデーションを

持っていた。こうした漢ナショナリズムは、周辺地域の民族をどう扱うのか。違う形のネイションを構想するに際し、文化ナショナリズム(言語を含む)のようなシンボルによって様々な民族を統合していく必要が生じた。

コメント②:「言文がほぼ一致した社会に生きている私たちが、『言文を一致させようかどうしようか』と言っている人の気持ちを想像するのは簡単ではない」

回答②: 言と文は原理的に一致しているのか? 章炳麟は音声言語について「不言もまた言である」と述べた。空間を共有する人々のあいだで、書き言葉では表現できないもの、すなわち空気感(間、抑揚、身振り手振り)や方言のイントネーションやアクセントを、受け取り手が解釈して受け取る。

コメント③:「音がなくても意味がわかる文字の話聞いて、私は、ヨーロッパの教会のステンドグラスに描かれている宗教画を思い出したのですが、絵と文字の境界線はどこに引かれるのでしょうか。仮に音のない文字が存在するとしたら、それは絵だということはどうですか?」

回答③: 漢字とは形象 (figure) であり、抽象

の概念にするには洗練されていないとする意見がある。しかし、本当にそうだろうか。一方、章炳麟は文字が文字であるゆえんは文字の独自性にある、話し言葉は線であり、瞬間的に消えていく、書き言葉は二次元的面であると述べている。一種のシンボライゼーションとしての言語という考え方であり、彼はいったん文字と音声とを切り離して文字特有の性質を考えようとした。

コメント④:「数学やプログラミング言語と言った、音声に頼らず論理を示す文字もあることを考えると、哲学のような人文的な問題も、音声に頼らない文字を用いた方がむしろ有効なのではとも考えます」

回答④: 哲学のような人文学の問題を音声に頼らない文字で書くとはどういうことか。純粋に記号であらわされる幾何学に対し、神や幽霊などへの想像力について、論理的な言語はどのように対応できるのか。

コメント⑤:「19世紀末から20世紀初頭の東アジア諸国の人々が日本で学び活動していたことに関して、現代日本を考える上で何をすべきか、というヒントがあるように思えた」

回答⑤: この時期、中国からは政治家、革命家、清朝の官僚たちでさえも日本(主として東京)に留学していた。中国革命は東京の一部の地域で画策されていたと考えると、ナショナルな活動も横のつながりを持って進んでいたというダイナミクスが見えてくる。

1. 書かれたものに対するソクラテスの考え(プラトン『パイドロス』より)

プラトンは『パイドロス』の中で、内部的なも

のとしての「記憶」、外部的なものとしての「想起」という考え方を提示している。たとえば絵画に対して問いを発する権利を持たないように、書かれた言葉も問いに答えることはしない。もともと言葉を発する人は誰かに向けて発している。それが文字で書かれてしまうと、誰に向けての言葉も分からなくなってしまう。話しかけるべき相手以外の相手にも話しかけているようなことも生じてしまう。

しかしその後、「魂の中にほんとうの意味で書きこまれる言葉、ただそういう言葉の中にのみ、明瞭で、完全で、真剣な熱意に値する」と述べる。書き言葉ではだめ、と言っているのにここでは「書き込まれる」と言っているのはなぜであろうか。なぜ魂の中に「書き込まれる」必要があるのか。このことから「書くということ」について考えてみたい。

デリダによれば、パロール(話しことば)のうちにはもっと根源的なエクリチュール(書きことば)が埋め込まれているのではないか、という。プラトンはパロールによってエクリチュールを断罪したのではなく、あるエクリチュールを別のエクリチュールよりも大切に、パロール中心のように見えながら魂の中にエクリチュールが入り込んでいる。したがって、プラトンの言う「魂の中に書きこまれる言葉」とは、パロールのうちにはもっと根源的なエクリチュールが埋め込まれているということの意味しているのではないだろうか。

そうであるならば、なぜプラトンは「書いた」のだろうか? プラトンは、プラトンの著作なるものはなく、プラトンの名で指されているものは「ソクラテスに由来する」と述べる。この点について高橋哲哉は、「ソクラテスのも

の」として書かれた書物は、初めから死者、幽霊によって書かれたことを前提としていることを強調することで、プラトンが徹底的にエクリチュールを排除したとする。しかしそうであるならば、父親を持たない私生児的なエクリチュールとは、誰による書きものとして世に送り出されたものなのであろうか。

再びデリダによれば、書かれたものが父親の手から離れた時点で、書かれたものの正しさを証明することはできない。また、書かれたものと読む人の間には常にずれ(時間(解釈)のずれ)＝差延が生じる。このズレをもって、書物と読んでいる私の間での対話が成立していると言えるのかもしれない。このように考えてみると、プラトンの書物はソクラテスのものでなければならず、また、2000年にわたるプラトンに対する注釈の歴史とは、読解を通じた対話のプロセスである。



2. 孔子は書いたのか？

孔子は「述べて創作はしない」と述べたとされており、実際にも孔子自身が書いたものは残っていない。『論語』とは孔子の弟子たちが孔子の言行録をまとめたもの。孔子も勉強していたとされる儒学の經典として伝わっ

た「六経」(詩、書、礼、楽(ガク)、易、春秋)は、漢代に入ってから始めて確立し、「十三経」や「四書五経」のように整理されながら、歴代王朝の公式イデオロギーとして利用されていった(「経学」)。しかし実際には、秦の始皇帝による焚書坑儒が示すように、孔子以前のものには存在していない。したがって、孔子が何を「読んだ」かは永遠にわからない。書かれたものではなく、口伝えで傳承されてきたものであると考えられる。

3. 王朝体制から共和国へ

1905年に科挙が廃止されると、知識構造は大きく変化した。1911年の辛亥革命を経て中華民国が成立すると儒学が廃止され、二千年の王朝体制から近代的な共和制国家を新たな論理で正統化していく必要が生じた。では、何が新しい共和制国家のレジティマシーを担ったのか。

中華民国における「三民主義」という概念は、それまでの天下的世界観とは全く別の考え方であった。しかし王朝体制下、経学が支配していた時代の天下的世界観にも「天譴説」という考え方が存在した。小島毅の言葉によると「天災」は「人事」によって発生するという論理であり、その機能は現代日本における「世論」に相当するという。

また、氏族制社会の殷から、封建主義の周になると「天」という概念が出現した。同時に「民」も出現し、民の気持ちを代表する天、民から付託を得た天が行動するという考え方が現れた。

殷、周の時代にはまだ経書は成立していなかったが、亀甲に書きとめた文字には



「天」が示されていた。天が正しいことをするのであるから、天においてその政治が正しいかどうかは担保される。殷時代の氏族制時代の神ではなく、封建社会ではさらに上位の普遍的概念としての「天」が必要となり、政治は「天」意に基づいていることを常に証明していく必要が生じた。そこで、「天」はのちの王に対する行動指針を表すパフォーマンスを示すものとして利用されていた。

4. 近代国家体型の成立と「文」

では、経書(経学)がなくなった近代において、どうすればよいのか。周作人は、漢文の力、すなわち中国固有の思想の力に頼ることが新しい近代国家の正統性原理を担保するために必要であると考えた。中国の根本としての儒家や儒学思想は、それらが出来上がる前から生活の中に存在した。生活を書きうつす文学は漢字を使って書かれなければならないと彼は言う。したがって漢字で書かれた文章をみると人々の生活がすべてわかるという普遍性を持っていたのである。

<コメントペーパー>

以前この講義の別の授業でエクリチュールのない言葉はあるが、パロールのない言葉はないとのお話があった。今日の講義でデリダの言葉のうちにパロールのうちにもエクリチュールが埋め込まれているという部分があったが、言語が高度化しエクリチュールがその言語体系に影響を与えているようになることは、元となるパロールにエクリチュールが注入、浸透するということなのだなと思った。(文 I・2 年)

辛亥革命によって中国は約 2000 年続いた王朝体制から脱却し、それに伴って儒教や孔子崇拝が禁じられたという話がありました。その理由はそれらが封建的であるということでしたが、結局はそれらに代わる新しい国家の正当化の根拠は知識人のみで共有されていたにすぎないのでしょうか。民衆レベルにまでそのような考えが浸透していたのでしょうか。(文 I・2 年)

アリストテレスと孔子の共通点として「書く」ということをしなかったこと、その言行が弟子たちの「書く」という行為により後世に伝わったことなど、不思議な符号と感じる。(文 III・2 年)

ソクラテスやプラトンは、「魂の中にほんとうの意味で書き込まれる言葉」がよい書き言葉であり、そうでないものは「おかまいなしに、転々とめぐり歩く」と言っている。自分の考えたことをそのまま相手に伝えたいときには確かにそうかもしれないけれど、読む人にとって受け取り方が変わるような書き言葉というものも、「書き手→読み手」という一方向性が作り出すおもしろさなのではないかと思った。(文 I・1 年)

プラトンの言わんとしたことは、「文字で記すことによって本質と文字で記されたものがはなれていきがちだから、本質を心にとめることを重視すべき」というような内容だと思った。(文 III・1 年)

「国文」と漢文／漢字、価値観の相克

——韓国併合以前——

三ツ井崇(本学総合文化研究科言語情報科学専攻・准教授)

第7回:2013年11月18日

講師紹介

三ツ井崇

(みつい たかし)

東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻・准教授。



専門は朝鮮近現代史。主に教育史・文化政策／運動史を研究する。主著に『朝鮮植民地支配と言語』(明石書店、2010年)、『植民地朝鮮の言語支配の構造』(ソミョン出版[韓国]、2013年、朝鮮語)などがある。

講義内容

0. はじめに

朝鮮の近代は1860年代後半から1870年代初頭を起点とし、1945年8月15日を終点としている。近代の中での時期区分は、開港、日清・日露戦争、日本の「保護国化」、韓国併合(1910年)、三・一独立運動(1919年)、日中戦争(1937年)、解放(1945年)であり、開港から韓国併合までは「開化期」と呼ばれる。日本による植民地期の統治の観点から、韓国併合から三・一独立運動までを武断政治期、三・一独立運動から日中戦争までを文化政治期、日中戦争から解放までが皇民

化政策期と区分されている。

近代史の文脈で、文字がどのように立ち現われてきたか。このことは、歴史認識問題としても扱われてきた。

「言語的近代」とは、口語(俗語)に基づく書きことばを形成し、かつての文語(≒古典語)との機能／価値転換を迫るものであった。この中で、口語(俗語)の「国(民)語(national language)」化が模索され、様々な言語改革に取り組んだ。朝鮮の場合は、前近代において、中国と冊封関係を結び、政治文化的つながりが強い状態であった。公的言語として漢文(真文)が位置づけられ、特権層の言語とされる一方で、朝鮮語は俗語であった。これらの言語使用は階層化、ジェンダー化されたものであった。しかしながら、近代化への移行は、階層化・ジェンダー化を解体し、国民という均質なものを創造するという課題を持った。そこで大多数が使用する「俗語」を国語とする価値転換が行われていき、「俗語」は書き言葉としての威信を獲得していった。このことは、言語だけではなく文字の問題も惹起した。漢字で書かれる漢文に対して、朝鮮語は「諺文」で書かれていたが、表記の統一はされていなかった。そのため、表記、語彙、標準語に関する規範の整備が必要とされた。ただし、漢字が持っていた位置を朝鮮語が占めることはなく、漢字

自体は使われ続けた。このような文字の近代化は朝鮮をめぐる国際関係が変動する中で進行し、様々な価値観が登場し、葛藤を引き起こした(講義では、一例として『マンガ嫌韓流』(2005)の内容を提示した)。

1. 朝鮮の開化とハングル使用:『漢城周報』におけるハングル採用問題

新聞が新たなメディアとして登場する中、初めてハングルを用いた新聞『漢城周報』(1885年)が発刊された。それ以前の新聞『漢城旬報』(1882年)は全てが漢文・漢字であった。これらの新聞発行におけるハングルの使用に関して、福沢諭吉の門下生で、新聞編集・技術スタッフとして朝鮮に派遣された井上角五郎と朝鮮人学者の姜瑋の働きかけにより、導入されることとなった。当時の開化派の中には様々な立場があったが、皆儒学の素養があり、ハングル導入による特権層の反発を危惧していた。そのため、当初の新聞は全て漢文・漢字で書かれた。そこで、井上らが国王へハングルの使用を働きかけ、政治家や学者ら様々な担い手による議論を経て、国王は導入に踏み切った。国王がハングルの使用を受け入れた背景として、当時の朝鮮政府は清朝との宗属関係に対して変化の兆しを見せていた時期でもあった。



2. 「諺文」から「国文」へ:「国文」ナショナリズムの展開

1894年には「甲午改革」を実施し、身分制度やそれを支える教育制度を一切撤廃し、清朝との宗属関係を廃止した。その中で、開国503年勅令第1号「公文式」の第14条で、ハングルは「諺文」から「国文」へ転換され、公用化された。この転換の思想的背景として、日本へ留学経験のある兪吉濬の著書『西遊見聞』(1895年)を概観すると、文字はその国の人々の精神を規定することや、中国と朝鮮の差異が述べられていた。国民を創り出すために「国語」としてハングルの教育を導入する必要性が説かれ、言語政策、文字政策が行われた。

このようなナショナリズムの意識は、中国からいかに独立するかという観点から語られるものから、徐々に日本との関係で語られるものへと変化する。日露戦争後、日本の「保護国」となったのち、日本は統監府を設置し、朝鮮の内政への関与を強めようとした。それに対して旧特権層の中から様々な勢力が台頭した。その中で愛国啓蒙を掲げる勢力が国粹的な言語観を掲げていった。1906年には普通学校(小学校)で「国語」教育が

導入され、同時に日本語も必修化された。「国文」改革は本格化し、1907年には大韓帝国政府によって学部内に「国文研究所」が設置された。

3. 言語規範と言語接触:「国文」と「国漢文」

朝鮮語を書き表すことは、ただ「国文」で書けばよいというものではなかった。従来 of 漢文文化を踏襲した語彙が行政用語等の中で残っているが、一般の人々にとっては理解不能な状況に直面した。そこで、語彙、文体、表記の改革が必要となった。規範的な音と実際の音が異なるという状況で、全てハングルで表現することは困難を極めた。そのため、語彙的意味を漢字で書き、文法的意味をハングルで書くという「国漢文」が採用された。一方、漢字は、日本から流入する近代的概念を効率的に習得することを可能とするものであった。ここで、漢字を近代的文字使用に従属させるという価値の転換が図られた。



4. 言語接触の場としての「国漢文」

日本語を介した語彙の流入は、異言語との接触をもたらした。これを担った一つの要素として朝鮮人の日本留学を挙げることができる。彼らは日本からの思想連鎖をもたらし、改革派となり、言語の問題から政治文化の問題へと影響を与えた。

5. 漢文知識人の反発

「国文」使用による漢文の追放に対して、儒学を知識の拠り所とする多くの知識人が反発し、これが甲午改革末期に表面化した。保護国期においては、東洋主義を掲げる大東学会のように国文中心主義を唱える愛国啓蒙運動を国粹的であるとして批判する勢力も現れた。

6. 小括

「国文」ナショナリズムは、朝鮮半島を取り巻く国際社会の変動に連動して性格が変化してきた。甲午改革期においては清朝からの独立を掲げ、「保護国」期においては、日本からの独立を念頭に置いたナショナリズムが形成された。この言語・文字問題をめぐっては、多様な声が存在しており、全てが同時代の現象として立ち現われた。一方、日本勢力の侵入は、「保護国」化以前から日本人居留民の朝鮮半島内陸進出によって生じており、日常生活における言語接触が起こっていた。

<コメントペーパー>

中国では主に前近代から中国で用いられていた漢語と、新しく流入してきた西洋語、文語と口語の対立という形であったのに対して、朝鮮では日本の統治の中で、さらに複雑な構造があると感じた。(理 I・1 年)

日本と韓国を比較したとき、韓国は日本の植民地統治を経験したことで、より急激に言語体系を転換させた一方で、日本は西洋との衝突における変化はあったものの、韓国よりは緩やかなもののように思われる。結果として、韓国では識字率向上に寄与したことは間違いない。日本では、緩やかな変化が止まらず、混沌とした言語体系へと変わり続ける現象が起こっているようにも思う。(文 I・2 年)

同様に漢字と国の字(ひらがな、カタカナ)が併存している日本においては、どうしてすんなり(?)と両者が併存したまま現在に至ったのか。日本と朝鮮を分かつのは一体何だったのか気になる。(文 III・2 年)

交錯する言語的近代

——コロニアリズムとナショナリズム(植民地期～現代)——

三ツ井崇(本学総合文化研究科言語情報科学専攻・准教授)

第8回:2013年12月2日

講師紹介

三ツ井崇

(みつい たかし)

東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻・准教授。

専門は朝鮮近現代史。主に教

育史・文化政策

／運動史を研究

する。主著に『朝鮮植民地支配と言語』(明石書店、2010年)、『植民地朝鮮の言語支配の構造』(ソミョン出版[韓国]、2013年、朝鮮語)などがある。



講義内容

0. はじめに

20世紀初頭、日本の植民地下に置かれた朝鮮において、現代まで継続する問題を問う。前回の授業で提示した『マンガ嫌韓流』には次の問題が考えられる。史実の選択的紹介により、事実と事実の連鎖関係に恣意的な解釈が入り込む点、「近代化」に対する日本人の関与に対する肯定的な評価、様々な主体が入り組んで関与したという事実が捨象される点である。「近代化」の無条件な肯定は、背景としての日本の侵略の肯定につ

ながる。そのため同書のような解釈は、朝鮮語の体系や言語・文字使用／意識の実際を踏まえない勝手な解釈となっており、植民地期の言語環境について理解する必要がある。植民地期には日本語という要素が朝鮮半島の言語環境を規定する要因として機能した。植民地問題に対するイメージとして、「日本語を強制した」と言う時、朝鮮語における漢字漢文の問題はあまり語られない。

植民地期は、文字環境の多様化(日本式の仮名、音声言語としての日本語の導入)をもたらした。ただし、日本語も厳密には標準規範が確立されていない状態であったため、標準語が朝鮮半島に導入されたかは疑問である。この日本語が教育機関における必修科目「国語」として取り込まれ、生活の場にも日本語／仮名が音声や視覚として入り込んだ。結果、朝鮮半島は言語接触の場となった。

当時、朝鮮語も「国語」化のプロセスが進行していた。日本語が「国語」として導入されたことで、日本語と朝鮮語の間で序列化が生じた。他方、言語規範の整備も並行して実施される。近代語＝「出版語」としての日本語と朝鮮語が拮抗し、朝鮮語の言語ナショナリズムが意識されるようになった。それは言語政策と言語運動として表れ、担い手の

複数性が露わになり、また、それぞれの意識が交錯するようになる。植民地支配からの解放後、新たな国家建設の過程で、植民地化以前の言語に関する問題が引き継がれていくことになる。

1. 支配政策における朝鮮語の取り扱いとその迷走:「国語」の論理の衝突

1911年8月23日の朝鮮教育令(明治44年勅令第229号)によって、日本の「国語」イデオロギーが植民地へ拡大し、朝鮮にも受け継がれた。上田万年は『国語と国家と』(1894年)の中で、「国語」・「国民」・「国家」の一体性を強調し、中核民族として「大和民族」を位置付けた。また三土忠造は上田の影響を受け、朝鮮人の「同化」論を提唱する。三土は大韓帝国政府で学政参与官、学部書記官としての経験を持ち、「同化」の手段としての日本語普及と朝鮮語教育廃止の論理を述べた。これは、二重言語状態や朝鮮語規範化に対する危機感によるもので、朝鮮語の「国語」化がすでに進展していた状態で植民地化したという事情が背景にあった。そこで「国語」の論理の衝突が生じることになるのである。これに対して朝鮮知識人は反発を示す。例えば、「国語の語音」(『東亞日報』1926年11月5日付社説)では、「家庭と社会が朝鮮語の愛護者となれ」などナショナリズムの意識が強くなるが、これは朝鮮総督府警察局の押収対象となったことからもわかるとおり、総督府にとっては危険な考え方であった。

しかしながら、朝鮮語(教育)を廃止することはできなかった。「国語」と朝鮮語が非対称な関係にあるものの、朝鮮語を全廃はできなかったのである。1937年まで初等学校

では朝鮮語科は必修科目とされ続け、植民地期末期の1943年でさえ日本語普及率が22.15%程度であったことから、「国語」による「同化」は失敗したのである。しかし、日中戦争期以降、朝鮮語は必修科目ではなくなってしまうが、総督府系新聞である朝鮮語新聞『毎日申(新)報』や日本人官吏に対する朝鮮語奨励政策が植民地末期まで続けられたなど、朝鮮語を利用せねばならない状況であった。朝鮮語メディアに対する監視や検閲に関わる中、朝鮮語を支配の一環として利用・管理する政策をとった。

2. 朝鮮語規範化をめぐる政策と運動の交錯:朝鮮語綴字法問題を中心に

植民地期、政治活動に携われなかった知識人たちは「民族語」を言語運動として維持しようとし、朝鮮語規範化運動(「ハングル運動」)を展開する。これは、ハングル専用化を目的とした運動であった。三・一独立運動後の文化政治の中、言論・出版・結社の規制が緩和され、言語運動が表面化した。言語運動の流れは、その主張の内容にしたがい、「ハングル派」と「正音派」の対立として整理されることが多い。これらは、主張の差異はあれ、ナショナリズムを前提とした「民族語」化という韓国併合以前の課題を引き継いだものであった。この運動には言語教育者を多数含んでいたため、朝鮮語教育の場が言語運動の実践の場の一つとなっていく。

総督府は必修科目として朝鮮語を設置する際に教科書編纂が必要となり、朝鮮語の綴字法規定に関与し、「諺文綴字法」を制定した。綴字法は「普通学校用諺文綴字法」(1912年)、「普通学校用綴字法大要」(1921年)、「諺文綴字法」(1930年)と三度改定さ

れた。1912年と1921年の法は内容的な差はないが、1930年の綴字法では朝鮮語規範化運動に対応して大きく変化した。これは同床異夢の総督府と運動家が協調関係を示した事例であり、総督府が言語支配の場に言語運動を動員する構図をもたらした。総督府にとって朝鮮語規範化と「民族」は複雑な問題をはらんだ。朝鮮語の「管理」を自前で行わねばならないにもかかわらず、その能力を欠き、結局、それを補うために朝鮮語をナショナルな存在として認めざるを得なかった。言語運動を動員せざるを得なかった要因である。朝鮮語規範化運動は、朝鮮語学会事件(1942年)に端を発した言語運動団体の弾圧によって、挫折を余儀なくされた。しかし、それは朝鮮語をナショナルな存在として認めた総督府にとっても、大きな矛盾となった。

3. 漢字・漢文の世界とハングルナショナリズム

地域社会では、旧両班層が勢力を維持していた。彼らは儒教を教養の基礎とし、1930年代の朝鮮語の出版物では族譜(両班層の一族ごとの系図)や文集(儒者たちが書いたものの集成)が多数を占めていた。漢文要素は限定的な範囲で残存し、厳格な階級意識に基づかれた。そのため、民族主義を掲げる新知識層との間で軋轢が生まれた。総督府の規制が布かれた以降も、漢文教育は改良書堂で残存していた。これは地域社会において、伝統的教育観や知識観を残すものであった。

漢字・漢文の問題は朝鮮語規範化の問題とも連動していた。一つ目に、「国漢文」の問題である。一口に「国漢文」といっても、当

時は、漢文のシンタックスを多く残したものと、朝鮮語のシンタックスに漢語的な要素が単語レベルで残存するものにいたるまでヴァリエーションがあったことはおさえておく必要がある。

二つ目に、朝鮮語規範化の際にも、漢字音とハングル表記が主題化され、表音主義と伝統音主義(規範主義)に分かれたという点である。その意味では、言語運動のイメージとしては「ハングル派」対「正音派」の対立だけでなく、「伝統派」の存在を措定する必要があるかもしれない。

三つ目に、「民族文化」の捉え方を巡り、「訓民正音」が創定された15世紀以前に「民族文化」の要素を溯らせる際には、ハングルナショナリズムは逆に障害になってしまふ。その際、伝統的な漢字文化に対する評価が「民族性」とかかわって出てくる場合もあることを朝鮮文学者・趙潤済の言説から確認した。要するに、言語・文字ナショナリズムにもヴァリエーションがあったことになる。

4. 日本語との言語接触とそのコンテキスト

(1) 朝鮮の言語生活と日本語

日本語の普及に伴い、日本語を完全に運用する層が出現した。全体としては2割(22.15%)の普及率であるとしても、普及するところには集中して普及されたことを意味しよう。他方、九州や関西等の地方出身の日本人が教員として朝鮮で日本語を教えたことによって、日本語の規範意識は徹底されなかった。

一方で、言語使用という問題を考えたとき、朝鮮語の言語生活の中に、日本語の語彙が浸透するようになった。このことも「普及」を語るうえでは無視できない。

(2) 植民地期における日本語系語彙

近代「遺産」としての日本語系語彙の問題は、解放後の「国語醇化」という課題と結合する。行政・生活用語などの領域で日本語系語彙が残存した。また専門語彙が流入し、定着する経路で植民地期の人々の思想、動き、社会状況などを深く連動することとなった。それらの日本語系語彙については、歴史的背景を踏まえながら、その定着経路について考察してみる必要がある。

(3) 植民地期朝鮮人の日本語意識

日本語教育に対して、朝鮮知識人は反発を見せる一方、モダンさの表象等、言語生活上で部分的に使用していた。モダニティとコロニアリズムが一体化した事例で、植民地宗主国の言語・文化ヘゲモニーの強さを示している。

ここで、朝鮮人作家の二重人作家の二重言語創作問題を見てみると、金史良の「天馬」(1940年)で、朝鮮人作家の「国語」・「国民」文化への同化が日本文学者に承認されない状況が浮かび上がる。「国語」世界への同化と排除の構造が表れており、言語的アイデンティティの分裂と葛藤が描かれた。

5. 解放後に引き継がれる問題: 南朝鮮／韓国を中心に

(1) 日本語「残滓」と「国語醇化」

日本語排斥が早期に進展した北朝鮮に対し、米軍政下の南朝鮮では遅々として進展しなかった。1949年に朝鮮語学会が「ハングルの日」を主催し、「倭色看板一掃」を唱えた。この動きは、朴大統領下の「民族中興」、「新文化建設」によって1970年代後半に本格化し、ハングル専用化の動きが加速した。

(2) ハングル専用化と漢字

1948年10月9日に法律第6号「ハングル専用に関する法律」が制定され、公文書をハングルで書くことが規定された。しかしながら、公文書の範囲が曖昧等、国会の質疑では反論も提出された。一方、漢字復興論は現在でも続くが、ハングル専用化への反対が一律に日本の植民地支配容認であるかのように捉えられる構図となっている。

また、1950年代の「ハングル波動」では、綴字法案をめぐる対立が再燃した。焦点は形態主義と表音主義であった。これは植民地期の「ハングル派」対「正音派」の対立さながらで、植民地期における抵抗の記憶と文字使用の問題がからまって展開している。

6. まとめ

「言語・文字問題」は、歴史的な文脈を捨象できない。「言語・文字問題」はそれ自体が歴史を構成するものとしてとらえる必要がある。言語から見た近代と現代の問題を考える際に、言語に対する知識と社会・歴史に対する知識の両者を動員する必要がある。

<コメントペーパー>

言語ナショナリズムが進展する中で植民地化という外圧がかかることで、朝鮮語はここまでの複雑さを見せると理解した。この複雑な様相はやはり朝鮮の人々の国民意識にも見られるのだろうか。
(文 III・4 年)

言語に完全な中立性がなく、一定のイデオロギーを含む以上、現代においても日本語延いては漢字の復興が植民地支配容認とわられてしまうのが仕方ないとしても、そこをもう少し切り離さなければ日韓、日朝の関係性の改善は期待できないように思われる。(文 I・2 年)

歴史というのは言語や文字を用いて語りつがれたり、記述されたりするのですから、冷静に考えたら、「言語・文字運動」を歴史的コンテキストから離せないことは分かるのですが、注意していないとそのことを忘れてしまいます。その意味で、今日の講義はそのことに気付くことができ良かったと思います。(文 I・1 年)

総督府の「国語」化政策は全然日本の思い通りには進まなかったのだとはじめて知りました。どのような人々がどの言語・文字を選ぶのかは歴史の影響がとても大きいのだと改めて知ることができました。(文 III・1 年)

「漢字廃止」とは何か？

——ベトナムの経験——

岩月純一(本学総合文化研究科言語情報科学専攻)

第9回:2013年12月9日

講師紹介

岩月純一
(いわつき じゅんいち)
東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻・准教授。



専門は社会言語学・近代東アジア言語政策史。特に19世紀末から20世紀前半にかけてのベトナムにおける書記言語の交代と変容の過程を研究している。主な論文は「近代ベトナムにおける『漢字』の問題」(村田雄二郎、C・ラマール編『漢字圏の近代:ことばと国家』東京大学出版会、2005年、131-147ページ)、「ベトナムの「訓読」と日本の「訓読」:「漢文文化圏」の多様性」(中村春作ほか編『「訓読」論:東アジア漢文世界と日本語』勉誠出版、2008年、105-119ページ)など。

講義内容

1. われわれ「日本人」にとって「漢字廃止」とは何か？

漢字を廃止した例として取り上げられるベトナムに対して、我々日本人はいかなるイメー

ジを持っているか。我々の見方に偏りはないだろうか。漢字廃止がアイデンティティ崩壊の恐怖を抱えるものと考えていないか。これはベトナムで実際に何が起きているのかを細かく踏まえた議論ではない。

2. ベトナム語の特徴

ベトナム語は現在ローマ字で表記されているが、その中には漢文の借用語が多く含まれている。これは漢文が使われてきた歴史と関係がある。ベトナム語は音節構造が複雑な単音節語であり、声調言語であり、孤立語である。新聞を見ると、漢字語由来の単語が多いが、小説や日常会話では漢字語の割合は低い。日本語で仮借字に基づく仮名が発達した背景には、音節構造が単純であるために発音が同じ漢字を借りることが可能だった点があげられるが、ベトナム語の場合は音節が複雑であるため、発音が全く同じ漢字の字形を借りて全ての単語を表記することは不可能である。そこで、仮借字のほか、本来の漢字にない独自の偏旁の組み合わせをつくって書き表すようになった。これをチュノムといい、漢字とチュノムを交ぜた書きことばが使われていた。

3. 近代ベトナムの歴史

近代ベトナムは、阮朝による統一を経て、フ

ランスによって植民地化された歴史を持つ。植民地侵略後、ベトナムは三分割された。南部のコーチシナ地方は割譲されフランス領になったが、北部のトンキンと中部のアンナンは阮朝統治下に残し、保護国化した。軍事的反抗である反仏運動が生じたが、挫折し、20世紀初頭には東遊運動や東京義塾といった社会・文化の再構築へ移行するようになる。1910年代後半から1920年代前半まで、第1次世界大戦勃発を背景として、「仏越提携」という文化的に寛容な政策を採るようになる。1930年代になると、共産主義運動が台頭し、ベトナム人の独立運動の主要な部分を占める。1940年代になると日本軍が進駐するが、当時フランス本国はナチスの占領下にあり、日本はナチスと防共協定を結んでいたため、インドシナではフランス軍と日本軍が共存していた。しかし、1945年3月に日本軍はクーデタを起こし、フランス軍の権力を奪い、阮朝の「独立」を認めた。日本の敗戦直後、ベトミンが総蜂起をして、ベトナム民主共和国が成立したが、フランスは認めず、インドシナ戦争へ突入した。ジュネーブ休戦協定の後、ベトナムは南北に分断され、さらにアメリカの介入によってベトナム戦争へ突入する。戦後1986年にドイモイを提唱し、1990年代から開放政策が本格化された。



4. 文字言語の変容過程

ベトナム語のローマ字表記は、17世紀にカトリック宣教師によって創られたものであって、フランスが創ったわけではない。フランスによる侵略が始まった後、それ以前に存在していたローマ字が利用されるようになったのである。阮朝統治下のカトリック信者は弾圧されていたので、フランス軍が侵攻したときには進んでフランスに協力した。フランス人は最初フランス語を教えようとしたが、いきなりは難しいので、カトリック教会で使用されているローマ字ベトナム語を広めようとした。この動きはベトナム人の中からも生じた。カトリック宣教師のチュオン・ヴィン・キーは、ベトナムの遅れを変えていくためには、学びやすいローマ字でベトナム語を学べるようにするのが重要だと考え、辞書と教科書を作成してローマ字の普及を始めた。このローマ字ベトナム語は「クオックグー(国語)」と呼ばれた。当時のベトナムでは、ごく一部のエリートが漢文とチュノムを知っていただけであり、彼らはローマ字を未知の「野蛮」なものと捉えた。

それが変化するのが20世紀初頭である。科挙制度に対して限界を感じた新世代の知識人(開明的知識人)がローマ字を勉強し、

教育し始めた。当時フランス人は、「自分たちへの対抗者は儒教を学んだ者たちであり、ローマ字を学んだ者はフランスに近づいてくる」と思っていた。しかし、新知識人は必ずしもフランスに接近しようとしていたのではなく、教育を通じて将来の独立をめざしていた。この時期には、フランスがインドシナ大学を設立した 1907 年に開明的知識人が東京義塾を開設するなど、フランス植民地政庁と開明的知識人の間で教育をめぐる競争が生じる。

フランス直轄領であったコーチシナでは政策が厳しく、公文書での漢文の使用は一切禁じられ、科挙制度も廃止された。科挙の廃止はコーチシナから科挙の最終試験会場であるアンナンへの渡航禁止という形で行われた。そのような状況下におかれたコーチシナは、一方で近代的な新聞出版が最も早い地域でもあった。最古のローマ字ベトナム語による新聞は 1865 年に創刊された *Gia Dinh Bao* 紙である。官製新聞であったことからローマ字を広める意図があったと考えられる。その後 20 世紀の初頭になると、ローマ字ベトナム語を読み、ローマ字で物を考える読者層が出現した。

対照的に、アンナンでは新聞は全く出ていなかった。外部から入ってくることはあっても、自ら新聞を発行する動きは 1920 年代後半まで起こらなかった。

一方、トンキンでは漢文新聞『大南同文日報』が出ていたが、1905 年 5 月に初めてクオックグーで印刷された新聞 *Dai Viet Tan Bao* 紙が発行され、1907 年には『大南同文日報』の免許を譲り受けて東京義塾の機関紙である *Dang co Tung Bao* 紙が発行された。そこでは漢文とクオックグーの双方が用いら

れる一方、チュノムは「古い南の文字」と呼ばれ、古い言葉と見なされるようになっていた。

このようなバイリンガル状態が 10 年間続いた。1913 年には *Dong Duong Tap Chi* がトンキンで創刊され、これ以降漢文で書いた新聞は主流ではなくなった。このように 1905 年から 1915 年にかけてベトナムの書きことばは大きく変容した。この 10 年という年月は短いと感じるかもしれないが、生まれた子供が就学を終える位の期間であり、移行可能な長さと言えよう。この時期、教育とメディアの双方で同時にローマ字化が進み、メディアでは漢文が次第に使われなくなっていった。

ただし、漢字が完全に消えたわけではない。新聞はローマ字に移行しても、書籍はチュノムで印刷されたものが 1920 年代まで発行されていた。当時発行された共産党のビラにもチュノムで書かれたものがある。最終的に変わったのが 1930 年代である。1919 年の科挙完全廃止後、科挙受験という目標を失った漢文知識人は農村へ帰って私塾の教師になっていたが、30 年代になるとその中でもローマ字を教育するようになり、農村部でローマ字を覚える人が飛躍的に増えたからである。

植民地期ベトナムのリテラシーには 2 パターンある。漢文とチュノムを知っている人と、ローマ字を知っている人である。ローマ字が広く普及する一方、漢字しか知らない人は次第に淘汰されていったが、1945 年の独立以降、漢字教育がなくなったわけでもなく、使われなくなったわけでもない。1946 年のホーチミンの日記を見ても分かるように、個人のレベルでは使用され続けた。複数のリテラ

シー下で、人々は漢字とローマ字を混ぜて使用していた。現在、漢字とチュノムは「景観」として復活しつつあり、寺院の扁額等で見ることができる。



5. おわりに:「ベトナム人」とわたしたちの自己意識

今のベトナムでは、漢字を「読み書き」できる「ベトナム人」は専門家を中心とする少数にとどまるが、「自分たちが伝統を喪失した」とは考えておらず、ローマ字の普及は「当たり前前の結果」と考えている。逆に、われわれ「日本人」は、(現代)「日本語」を「読み書き」するための文字として漢字を知っているだけで、多くは漢文を読めなくなっているが、それは「伝統の喪失」ではないのか。何を「読み書き」できれば「漢字を知っている」ことになるのだろうか。

<コメントペーパー>

ローマ字表記化により、ベトナム語には日本語を仮名表記化することにより生じるであろう同音異義語の判別の問題はないのだろうか。(文 III・3 年)

文字の保存は必ずしもそれまでの文化の保存に結びつくとは限らない。このことは漢字を文化の保存だとして学習してきた自分の身にとっては新鮮なことだった。(文 I・2 年)

文字は思想を紙上で表す手段であり、その手段を支配することで人々を徐々にマインドコントロールしていくという手法におそろしさを覚えた。(文 II・1 年)

アイデンティティは音声の言葉についてくるもので、書き言葉(文字)とはそこまで深い関わりはないのかもしれないと思いました。(文 III・1 年)

漢字を知らながらローマ字表記を知る人が現れ、それを教育に用いると、そこでローマ字を学んだ人が教える立場になる時期から急激に普及が進むという世代交代に伴う流れは、言語に限らず外来の新しいもの一般に対して成立するものだと思った。(理 I・1 年)

「混ぜない「配合」？」

——「新漢語」のダイナミクス——

岩月純一(本学総合文化研究科言語情報科学専攻)

第9回:2013年12月16日

講師紹介

岩月純一

(いわつき じゅんいち)

東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻・准教授。



専門は社会言語学・近代東アジア言語政策史。特に19世紀末から20世紀前半にかけてのベトナムにおける書記言語の交代と変容の過程を研究している。主な論文は「近代ベトナムにおける『漢字』の問題」(村田雄二郎、C・ラマル編『漢字圏の近代:ことばと国家』東京大学出版会、2005年、131-147ページ)、「ベトナムの「訓読」と日本の「訓読」:「漢文文化圏」の多様性」(中村春作ほか編『「訓読」論:東アジア漢文世界と日本語』勉誠出版、2008年、105-119ページ)など。

講義内容

1. 「新漢語」とは

西洋にある概念を漢文に翻訳する時、二字分または四字分の漢字を選び、組み合わせることで、今までの漢籍にはない意味を示す単語を作り上げた。これを「新漢語」と呼ぶ。

これまでも用例が存在していたが異なる意味を示すものや、新しく発明されたもので構成されている。このような「新漢語」は19世紀から20世紀にかけて造られた。

漢字圏の現代語の語彙はかなりの部分がこの「新漢語」からなる。現在、漢字圏の言語間にある種の分かりやすさがあるのは、「漢字が分かるから」ではなく、「新漢語が共通して使われているから」であり、極めて新しい現象である。

借用語には、音を基礎として翻訳する音訳借用(日本語で言うカタカナ語)と、語の中の一つ一つの要素をそれぞれ翻訳して組み合わせる翻訳借用(カルク calque)がある。漢語にも翻訳借用された語は存在するが、「漢字二字がひとまとまり」という「字数の制限」が強いため、元の語が二つ以上の要素から成り立つこともあるために、翻訳借用が使いにくい。例えば「幾何」は英語では geometry と言うが、geo を音訳借用して「幾何」(jihé)とした。仮に翻訳借用しようとする、geo = 「地球、大地」、met = 「測」、ry = 「(それをするための)術」となり、漢字二字ではまとまらなくなる。そのため、二字漢語を知識人がそれぞれ「創作」し、競い合う形で新しい概念の漢語が構築された。

2. 「新漢語」の発生、19世紀末まで

19世紀以前、キリスト教宣教師によって、主として自然科学分野のヨーロッパ学術書(医学、天文学、動植物学、地理学)を中心とする知識が流入した。日本ではオランダの使節を通じて流入し、蘭学と呼ばれた。中国(「西学」)や朝鮮(「朝鮮実学」)も同様である。例えば、明末に中国に滞在したマテオ・リッチはキリスト教の宣教師として中国に滞在し、口述によって自然科学の知識を中国に伝えた。マテオ・リッチは口語としての中国語はできたが、漢文は書けなかったため、徐光啓による文字化によって『幾何原本』が作られた。

19世紀に入ると、プロテスタントの宣教師が流入し、東アジア各国の辞書(英華字典・華英辞典)を作り、ヨーロッパの概念の翻訳化に取り組んだ。それは東アジア側でヨーロッパの概念に興味を抱いた人たちに受け入れられた。さらに清朝がアヘン戦争に敗れるなど、ヨーロッパからの軍事的圧力の高まりとともに、ヨーロッパで形成された対等な主権国家間の約束である国際法概念(『万国公法』)の翻訳が試みられるようになった。日本では「蘭学」とは言わず「洋学」と呼ぶようになり、漢文に代わって訓読文(漢字カタカナ文)が新しい概念導入の媒体となった。

この時期に植民地化されたベトナムでは、漢文を知る伝統的知識人が尊皇攘夷を唱え、フランスに激しく抵抗していた。フランスはベトナムを三つに分割して力を弱める一方、漢籍禁輸政策をとって、ベトナム語のローマ字表記を普及しようとした。日本ではこの時期、「訓読文」が流行し、漢字を用いた訳語が試みられ、次第に広がった(「和製漢語」)が、ベトナムはこの動きから閉ざされて

おり、東アジアからの情報が流入しにくい状態にあり、特にローマ字表記のベトナム語で使われた新しい語彙は限定的であった。重視されたのは官職名であった。例えば、フランス語の「maire(市長)」は「Doc Ly(督理)」と訳され、トンキン地方の市長を意味した。「Résident Supérieur en Annam(アンナン理事長官)」は「Quan Kham su Trung Ky(中圻欽使大臣)」と訳された。ここで作られた語彙は、ベトナム外で通用せず、ベトナム内の地域性しか持っていないものであった。また、仏越辞書の中のフランス語単語に対するベトナム語の注釈をみると、政治的意味が捨象されている。これは植民地政府側に現地人の反抗を促したくないという意図があったためだと考えられる。



3. 「新漢語」の伝播と反応:1920年代まで

19世紀末に東アジアではヨーロッパに対する危機感から社会進化論が流行し、漢文に翻訳され、流通した。それ以前、日本では訓読体と口語とが「一つの日本語である」とは考えられていなかったが、20世紀初めの言文一致運動を通じて、はじめて「書き言葉と話し言葉を統合する日本語」というイメージができた。ほぼ同時期、中国ではまだ漢文が共通の書き言葉として流通しており、1895

年に厳復によって『天演論』が翻訳されるなど、独自の漢語が作られたが、広がらなかった。1900年以降、清国や朝鮮、ベトナムから多数の留学生が日本を訪れ、日本が情報交換のセンターとなった。日本で作られた漢語を中国の留学生が覚え、漢文で用いていた。この時期の中国では白話が広まりつつあったが、日本語をそのまま白話に訳すのは難しかった。朝鮮は日本の勢力圏に入っていたため次々日本から知識が流入した。

ベトナムでは漢籍が禁輸されていたため、流入しづらい状況にあったが、20世紀に入ると東アジアで起こっていることから全く遮断しておくことが困難になり、禁輸されていても密かに流入した。フランス植民地において、フランス語からローマ字へ翻訳されて概念が流入する他に、漢文を通じての概念流入が起こってきた。当時科挙を実施していたベトナムで流通していた1911年の受験参考書を見てみると、現在も使用する熟語が多数出てくる。科挙という古い制度が実施される一方で、試験の中身には漢文を通じて入ってきた新しい知識が入ってきていることが分かる。当時の知識人は依然として漢文で物事を考えていた。クオックゲーは十分な知識を伝える手段となっておらず、知識は依然として漢文で得るものであった。このように知識の伝達は、日本、中国、朝鮮に加え、ベトナムへ至るまで玉突きのように伝播し、受容された。

一方で、「新漢語」に対して、古典漢文になじんだ人や、逆にヨーロッパ語を原書で読める人には、違和感があった。原敬は「漢字減少論」の中で、使用する人によって毎日勝手に製造されていく「訳字(新漢語)」に対

する不満を述べ、この時期の日本語の混乱状況を憂いている。こうした違和感が消えていくのは、1920年代以降のことである。

ベトナムでは1920年代に新聞雑誌の刊行統制が緩和されたが、フランス語からクオックゲーに翻訳された語彙と、漢文から流入した語との間に不一致が生じた。そこで、『語彙集』が編纂され、ローマ字でつづられた新漢語にフランス語とベトナム語の注釈がつけられることで、フランス語・漢語・クオックゲーの三言語が次第に接続するようになった。その後、辞書編纂が進展していくが、この時期に取り入れられた新漢語の中で、現在まで定着しているものは半数程度であった。



4. 「新漢語」の定着と弱まり:1920年代以降

1910年代から1920年代にかけて、東アジアの共通語としての漢文は勢力が弱まり、「日本語」「朝鮮語」「中国語」など、「固有の」言語が確立した。さらに1920年代から1945年にかけて、アジア地域における日本の勢力拡張によって、日本語の優位性が強まった。

この時期の特徴は、新しい思想として共産主義が流入したことであり、そのための用語がドイツ語やロシア語から中国語や日本

語に翻訳され、流通した。当時作られた共産主義用語はその後の造語を規定した。一方ベトナムではフランス語を習得した人々が増え、原語から直接知識を取り入れることが可能となった。

1945年以降、日本が敗戦し、国民国家ごとに一言語という構造が確立する。冷戦構造の中で、社会主義陣営と自由主義陣営との間で行き来ができなくなり、ベトナムや朝鮮は域内で分断されたため、語彙が分かれるという現象が生じた。漢文が使われなくなったため、中国語から日本語へ借用の動きも見られない。造語は各国語で個別に行われるようになり、一致しなくなる。社会主義用語に関しては、象徴的語彙は共通する傾向があるが、思いがけない使われ方もされる。例えば「配合」という語は、日本語では、①組み合わせる、②男女をめあわせるというふたつの意味で使われるが、現代中国語の辞書には③各方面が分担して協力して任務を遂行するという意味も登録されている。「協力する」という意味は、中国語、北朝鮮、ベトナムのみで使われている。おそらく起源は中国で、社会主義圏だけへ拡大したと考えられる。

「新漢語」については、それが東アジアに共通していることだけに注目が集まるが、その広まり方や経路は非常に複雑である。20世紀の初めから1920年までに作られた漢語は、その時期までの漢文が知識人の共通語として位置づけられていたため、域内で一致しているが、その後作られた漢語は各「国語」の枠内で作られたために必ずしも意味が一致しなくなっていった。つまり、共通する語彙が作られた時代は、共通語としての漢文が消え行こうとしていた時代であった。

言語の変化とはダイナミズムを持った現象で、時代によって移り変わるものである。私たちが思っているほど、言葉とは不変的、停止的なものではなく、流動的なものだ。流動していく中で今のような形になっていったと考えていくほうがよい。

課題

東アジア各国の国家元首のことを何と呼ぶか。日本は君主制なので「天皇」だが、それ以外の共和制各国の President のことを、韓国は「大統領」、北朝鮮は「国家主席（金日成）」、中国も「国家主席」、ベトナムも「国家主席」、台湾と南ベトナムは「総統」と呼んだ。

社会主義圏では主席という称号が多い。主席という言葉は歴史的にはあまりさかのぼれない、社会主義者が好んで使ったのではないかと推測できる。韓国は「大統領」であるが、これはペリー来航の際に日本に宛てた国書の漢文版で初めて使われた訳語で、その後日本と韓国だけで使われ、それ以外の地域では流通していない。

ではなぜ日本では President を一律に「大統領」と訳さないのか？ また、ベトナムの president は、北は「国家主席」（chu tich nuoc）、南は「総統」（tong thong）というが、ある時期までの日本の新聞ではすべて「大統領」とされた。なぜこのような不一致が生じたのか？

課題への答え

中国の「国家主席」や台湾の「総統」は、中国や台湾が漢字を使っており、中国語を知らない日本人が見ても「国家主席」「総統」と

いう字は認識できるので、それをそのまま取り入れているが、ベトナムについては、1970年代までベトナム語を理解する人材が日本にほとんどおらず、英語やフランス語でしか情報を入手していなかったこと、そしてベトナム語の新聞を見ても漢字では書いていないことから、北ベトナムの「国家主席」(chutich nuoc)や南ベトナムの「総統」(tongthong)がそれだとは気がつかず、同じPresidentだとしか思わなかった。つまりこのような不一致は、ベトナムが漢字を「廃止」したこと、そして日本人がベトナム語を知らなかったことと関係がある。ベトナム語を理解する人材が増えた最近では、ベトナムの chutich nuoc は「国家主席」と訳される例が増えているが、「大統領」という訳と共存している。

もし President の訳を「大統領」に固定するならば、ベトナムの歴代大統領の全てを、「ホーチミン大統領」「グエンバンチュウ大統領」

「チュオンタンサン大統領」と訳してもかまわないことになるが、それならば、中国の「国家主席」や台湾の「総統」も「大統領」と訳して、「毛沢東大統領」「習近平大統領」「蒋介石大統領」「馬英九大統領」としないと一貫しない。けれども、そのような用例は一般的ではない。

中国語とベトナム語では、社会主義国の「国家主席」は「国家主席」と呼ぶが、資本主義国の President の訳は「総統」に固定されていて、韓国大統領も「韓国総統」(tongthong Han Quoc)としている。これに対し、日本語と韓国語では、上に説明したような一貫しない使い方をしている。

このように、漢語圏における漢語の共有は、ただ「共有している」というだけでは不十分で、むしろ共有しているが故に、こまかなニュアンスの差や歴史的経緯のせいで少しずつずれていることの方が重要なのである。

<コメントペーパー>

長い間言語的には比較的安定していた漢字文明圏が崩壊し、西洋文明が流入し始めてから、外交的、政治的な背景のもとで変化し続けているものだとわかりました。とくに、情報化社会になり世界が狭くなっていく中で、新しい語彙の翻訳の必要性が生じたことで、さらに各国で独自の語彙が形成されていく変動期の途中にあるということを実感しました。(文 I・2 年)

言葉は、その地域の文化のみならず、政治、社会制度とも密接に結びつき、学問的な語彙から政治的なものまで多分に含みを持っている。(文 III・1 年)

漢文が古いものになっていく中で形を変えつつ残った新漢語やその他漢語由来の語が「配合」の例に見られるように、全く異なる意味で定着することがあるというのは興味深く感じた。(理 I・1 年)

もう一つの中国か

——言語の近代化に於ける選択肢——

吉川雅之(本学総合文化研究科言語情報科学専攻・准教授)

第11回:2014年1月15日

講師紹介

吉川雅之

(よしかわ まさゆき)

東京大学総合文化研究科言語情報科学専攻・准教授。

専門は中国語学(音韻と文字、文献)、香港・澳門言語研究、東西言語文化交流史研究。東アジア大陸部の諸言語の音韻と文字について、(1)文献資料に基づく通時的研究、(2)野外調査データに基づく共時的研究、を行ってきた。最近は中国南部の非漢語や台湾の諸言語についても考察を試みている。主な著書に『香港粵語』シリーズ(白帝社)、『「読み・書き」から見た香港の転換期:1960~70年代のメディアと社会』(明石書店)がある。ホームページは、<http://www.ac.cyberhome.ne.jp/~hongkong-macao/index.html>。

講義内容

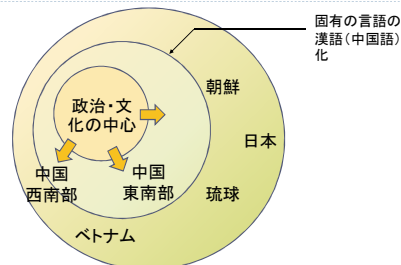
1. 清朝後期までの漢字文化圏(香港・台湾)の言語受容

香港や台湾は地政学的に中国の周縁部に位置し、漢字に代表される中国文化を歴史的に受容してきた。香港では英国の植民地支配がはじまるまで、台湾では日本の植民地支配がはじまるまで、書記言語は文言文(古典中国語)のみであった。音声言語は文

言文とは直接関わりのない固有の言語種である粵語(広東語)、閩南語(福建語)が用いられた。

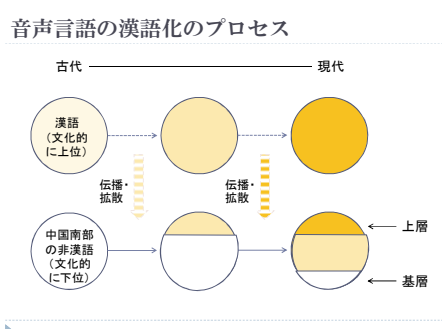
これら音声言語が記された文献は稀であり、戯曲の脚本や説唱文学の唱本、一部の地方誌に特徴的な語が漢字で表記されているのが散見される程度である。教育機関でも音声言語に特徴的な語の読み書きを教えることはなかった。

かつての漢字文化圏



歴史的に漢族、そしてその文化とともに漢語(中国語)は長江以北から以南へ伝播・拡散したわけであるが、東南部は同化が早かったのに対し、西南部は同化が遅れたようだ。そのため、現在では東南部に分布している諸言語は俗に「中国語の方言」と見なされるものであるのに対して、西南部では中国語と固有種たる少数民族語が二重構造を呈する。このような伝播・拡散は歴史的に数回起

こったと考えられ、東南部の言語は徐々に中国語へと同化していった。それが今日の広東語、福建語、客家語である。「中国語の方言」と称されるこれら東南部の漢語系諸語は、非漢語の基層に漢語が上層として堆積して形成された歴史を有するため、特徴的な語には漢字表記の存在しないものが含まれる。北からの漢字文化の伝播は、南固有の言語を変容させてきた。



2. 清朝後期以降の環境変化: 音声言語が書記される契機

かつて書記言語の正統なる地位を占めていた文言文は、いずれの地点の音声言語とも対応しておらず、音声言語を超越した存在であった。清朝末期以降、書記言語は白話文を経て現代中国語へと推移する。白話文は官話(北方中国語)との対応性のある程度有しているため、官話話者にとってはある程度言文一致に近い状況が実現したと言える。中華人民共和国が共通語として定めた普通話、発音は北京方言を基準とし、語彙は官話で広く使用されている形式を基準としている。ここで、中国北部における言文一致は基本的に達成をみることとなった。

これとは反対に、東南部において言文一致は一見達成されていないように見える。しかしながら、後述するように、香港と台湾は

独特な政治環境下に置かれたため、書記言語化の契機が失われたわけではなかった。またそれとは別に、香港(そして澳門も)では中華民国期以降も学校教育で書記言語(文言文・白話文・現代中国語)を広東語の漢字音で逐一朗読するスタイルが継承され、現代に至る。

3. 書記言語の音声言語化

香港では、漢字を広東音で朗読する習慣が伝承されたことで、書記言語の語彙や表現が音声言語である広東語の体系に吸収されるという現象が不断に起きた。レッグ (James Legge) が編集した『Lexilogus』(1841 年刊) には「新聞」「尊駕」「伶俐」といった語彙が中文と広東語の双方に見られるが、書記言語(文言文や白話文)から広東語に入ったものと推測される。見方を変えると、書記言語から広東語へ語彙が流入するという現象は、少なくとも近現代の広東語の語彙体系は、既に文言文・白話文(更には現代中国語)と(より本来の姿の)広東語との混合語を作り出したとも言える。

固有名詞「北京」を例に挙げよう。この漢字で書かれた語は発音してみないと何語であるかは分からない。言えるのは「漢字で書かれてある」ということだけである。これが各地の音声言語では [pei tɕiŋ] (官話)、[poʔ tɕiŋ] (呉語(上海))、[pɛt cin] (客家語)、[pɛk keŋ] (粵語)、[pak kiã] (閩南語)、[ʔbak kɪŋ] (ベトナム語)、[pʰɛkʰiN] (日本語) のように、それぞれの言語の発音で読まれる。「漢字」として書記言語から音声言語に入った語彙は、それぞれの音声言語の発音規則に従って処理されてきた。

しかし、文章という言語単位となると情況

は些か異なる。文法機能語は漢字表記からして言語間で異なるものが多いため、何語で書かれているかの判断材料となることが多い。

上述の混合語に関して付言すると、書記言語は音声言語に対してその上位文体(雅な文体)を形成する供給源としても機能した。香港では報道や演説などでは、書記言語の語・表現が多分に入った上位文体が使用されている。

4. 音声言語の書記言語化の最先端

前節3で述べた現象とは逆に、音声言語たる広東語が文字化され書記言語となる、そのような現象が戦後徐々に現れた。その最先端としてウェブサイトの事例を紹介する。ウェブサイトでは粵語で書くことが1990年代末期から普遍的現象として確認されている。広東語が使用されている証拠は、文法機能語などに現れる特徴的な文字で判断される。

規範化されていない音声言語であるにも拘わらず、広東語の文字化が物語る言語学的な意味は何か、逆説めいた現実を三点指摘する。①広東語に特徴的な語の多くは表記が統一されていないため、ウェブサイト上には同一の語を表す様々な形式が登場する。文字を分解して書くという方法すら見られる(例「0 架、o 家(=啲)」)。②英語の綴りが広東語語彙を表すために援用される。③広東語だけで書記を貫徹するのではなく、書記言語(現代中国語)や英語の語彙を混在させた文章も少なくない。

5. 香港粵語の書記言語化:ウェブサイトでの開花へと到る道程

前節4の状況は一朝一夕に現れたものではない。広東語に特徴的な形式の文字化は、戦後香港において漸次的発展を見せた。1940年代には、方言文学の一端を担う形で一時的に隆盛を見せたが、1960~70年代には漫画や新聞広告を除いてあまり見られなくなる。1980年代になるとラジオドラマの脚本が広東語で書かれたことで、文字化の一大転機が到来する。香港人は当時すでに書かれた広東語を読んで理解できる社会的な素地があったと言えよう。1990年代になると、媒体や作品数でも広がりを見せる。この広がりには、政治的要素に左右されず、香港返還後にはむしろその勢いを増した。2000年代にはインターネットで広東語の文字化は普遍的現象となったが、広東語で書かれた書籍(単行本)は2005年以降に衰退へと転ずる。2003年9月に中国からの個人旅行が解禁され、広東語が読めない人々に売れないものを敬遠するという、経済的理由が影響したためであろうか。

6. 香港の音声言語(粵語)とその書記言語化の近未来

今後、香港で広東語は書記言語化の道を進んでいくのか否か。三つの可能性を考えてみた。

(a)かつての広東広州と同じ道をたどり、書記言語化は沈静化する。香港では学校教育で書記言語(文言文・白話文・現代中国語)を広東語の漢字音で逐一朗読するスタイルが継承されてきたが、2008年頃より現代中国語(普通話)で書記言語を教えるスタイルに変更する学校が増えてきている。普通話で書記言語(現代中国語)を学ぶ世代は、やがて従来の香港人とは異なる言語観を持

つようになるだろう。それは香港人のアイデンティティをも変容させる可能性がある。

(b) 多数の市民が広東語の書記言語化から遠ざかる一方で、徹底して広東語で書こうとする集団が現れる。これは、台湾と同様に言語が政治問題化する可能性である。台湾では皆中国語を話せるが、そのような状況で徹底して台湾語を守ろうとする集団がある。劣勢に立たされた言語を守ろうというこの運動は、台湾独立という政治思想と連動している。従来香港で言語は政治問題化しなかった。ところが、近年は香港独立を目指す団体のウェブサイトが活性化しているが、そこでは広東語で積極的に書こうとする動きが見られる。

(c) 多数の市民の使用する形式がやがて社会的に緩やかな標準を形成し、香港独自の発展を遂げる。そこに現れるのは、英語や現代中国語の要素を加えることで達成される、広東語の高度な書記言語化かもしれない。本来の書記言語(現代中国語)と社会的な

機能を分担し合う、「もう一つの中国語」が誕生するかもしれない。

付言：香港で公共放送や映画、歌謡曲といった音声メディアにもっぱら広東語が使われていることは周知のとおりである。しかし、このことをもって広東語の書記言語化の背景と見なすことはできない。なぜならば、音声メディアにおける現地の音声言語の使用は、中国広東や福建、さらには大変限定的ではあるがシンガポールでも行われているが、これらの地域では広東語や閩南語の書記言語化という動きはほとんど起こらなかったからである。

<コメントペーパー>

音声言語の書記言語化という話を聞いて、地元の友人のメールやツイッターに方言が混ざっているのを思い出した。変換もうまくできないし、ひらがなばかりになって読みにくいにもかかわらず、方言で書いてしまいたい時もある。それと似ている気がした。(文 I・1 年)

香港における民族構成はどのように変化をしてきたのか、それが言語の変遷とどのような関係にあったのかが気になった。中国の支配下に入る前後、英領となる前後、返還後で、民族の出入りはあったと考えられるが、その際に音声言語に変化があったらうからである。(理 I・1 年)

言語運動が香港で起きてくるところには、1997 年から 2046 年という期間のタイムリミットがあることへの危機感が現れているかもしれません。(文 III・1 年)

香港における中国語教育のように、政府主導による言語の強制も見られるようだが、娯楽などの文化的レベルにおいても、その強制を逃れる形で、言語が広がっているようでもある。(文 I・2 年)

漢文の坩堝

——重層植民地支配下「台湾国語」が歩んだ道——

陳培豊(中央研究院台湾史研究所副研究員)

第12回 2014年1月20日

講師紹介

陳培豊

(ちんばいほう)

東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。

現在、台湾中

央研究院台湾史研究所副研究員。

著書に『「同化」の同床異夢－日本統治下台湾の国語教育史再考』(三元社)、『日本統治と植民地漢文－台湾における漢文の境界と想像』(三元社)。専門は台湾文学史、文化史、最近は台湾の歌謡研究について考察を行っている。



講義内容

日本及び中国国民党の重層的な「植民地」統治を受けて、台湾は漢字・漢文の坩堝となった。その状況下、「台湾語・台湾文」の形成と表意・表音文字との関係に注目し、台湾人アイデンティティの形成過程で漢字が果たした役割を論じる。

1. はじめに

台湾はエスニック構成が複雑で、言語構成も複雑である。日清戦争後、日本に支配さ

れた台湾は、和製漢語も含めた様々な漢字漢文の坩堝となり、台湾人アイデンティティを形成した。本講義では、台湾人アイデンティティの形成過程で、漢字が如何なる役割を果たしてきたかという問題について、「台湾語台湾文」の形成と表意、表音文字との関係に注目して述べる。

2. 混成漢文から始まった台湾の近代文学

日本による台湾支配は、思想上では儒教、文学上では漢字漢文及び漢詩の伝統文化、さらに音楽上では五声音階と七五調を被統治者の台湾と共有していた。西洋文明に対応するために、明治期日本は大量の和製漢語を生み出し、さらに漢文直訳体や漢文訓読体など漢字漢文を多く含んだ文体を生成し、それらの文体は近代日本語の雛形となる。

漢文は漢字の羅列である。文法は比較的簡単で、異なる言語間の「異種交配」ではなく、表意文字という「同文」による文の「近親増殖」の形をとる。日本統治下の台湾では言語文体の混成現象、つまり漢文の「クレオール現象」が生じた。いわゆる「植民地漢文」である。元来、支那式の漢字漢文や台湾式の漢字漢文は在地性を持ち、儒教の世界、台湾の風土に合致していた。ただし、混成文であるために原籍は不明である。植民

地漢文は統治者と被統治に共有され、重要なメディアの担い手となった。

1920年代中国では「言文一致」や近代啓蒙を目指して中国白話文運動が生まれた。中国の文章が台湾のメディアに転載され、台湾人自らも中国白話文運動に加担していった。台湾の近代化文体の揺らぎ現象と対岸の国語運動という言語ナショナリズムの発揚とが、「脱日入中」という意図を持って共振した。台湾人は台湾原籍の植民地漢文を「中国白話文」と錯覚した。台湾の「中国白話文」は「中国式」、「台湾式」、「日本式」の要素が恣意的に混合し、そのために当時の知識人は互いに相手の「中国白話文」は不純だと批判した。

台湾人の主な生活言語は、閩南語、客家語であるため、北京語に準拠する「中国白話文」とは言文不一致となる。「中国白話文」は一部の知識人が独占する「貴族的」な文体であり、農漁村、労働者の感情を表せない。そのために1930年代台湾知識人は、口語体に近い文体の創出や使用を提唱する台湾話文運動を展開した。

ところが、教育資源や表記の規範化の不備により、台湾話文運動は「歌を聴いて字を識る」という実践方法を提唱する。これは、漢字の視覚性を利用し、非識字者の耳に慣れ親しんだ流行歌や俗歌の聴覚的な記憶を通して文字の画像表記を認識させる識字法であった。そうして歌声、字形及び言葉の意義を総合的に認識させた（「逆向操縦」）。1930年代のレコード業界の出現は、台湾話文の識字法の実践可能性を高め、歌謡と識字と文学は強い依存関係で結ばれた。しかし庶民の口語体を目指したため、台湾話文は低俗、下品、前近代的と批判されることも

あった。

3. 日本帝国に支配された「台湾語台湾文」の運命

「中国白話文」、台湾話文をめぐる一連の論争や出版を通して、植民地漢文は一層進化し、複雑、抽象、近代啓蒙的な題目や内容を担えるようになった。相手の主張を批判し合いながらも、相互の文体に慣れ、近代小説の担い手にまで進化した。

「同文」が示すように、台湾と日本が共有するのは「文」であって、「言」ではない。植民地漢文は口語体に傾き、台湾人を中心とした文体となり、ついに日本人の読解能力の限界を超えた「異文」になった。植民地漢文は「同文同種」としてのプロパガンダの役割を失った。むしろ、メディア検閲の障害となり、統治者にとっては文体上の他者、敵となった。

1937年、軍部の主導によって日本語普及の障害を理由に、一部の刊行物の植民地漢文欄が廃止された。その際、統治当局は植民地漢文を「台湾語台湾文」と名づけた。



4. 漢字に呪縛された台湾語の自助再生の道

「台湾語台湾文」の生成過程で、植民地漢文を表音文字で表記する運動が見られた。

①1922年の蔡培火のローマ字運動と30年代の台湾白話字運動、②1920年代からの社会主義者によるエスペラント語運動、③1930年代の台湾話文/郷土文学運動、日本のカナ文字運動、中国の注音符號運動である。

統治者は大和魂や国民精神と無関係なローマ字運動を厳しく弾圧した。中国白話文派、台湾話文両派は漢字保存の姿勢を貫き、ローマ字運動は一部キリスト教徒の間だけで普及した。

客家籍の知識人も表音運動に反対した。台湾は多言語社会であり、多民族の意思疎通の共通媒介は言ではなく、文であり、漢字の可視性によって台湾は一つの言語共同体として形成され、維持されてきた。表音文字は言文一致を強調する反面、意思疎通の共通媒介を破壊し、閩南語を基準とする言文一致は客家人を言語共同体から排除することになりうる。

近代化社会を目指すために、言語の近代化及び近代的な言語に基づいた知識生産の累積が必要となる。漢字を「同文」ルートで利用し、植民地統治下の台湾人は日本、中国から多くの翻訳書、知的生産を素早く大量に入手した。表音文字による表記法の変換は、近代化の知的ルートの喪失を意味した。

実は日清戦争直後、日本人と台湾人は筆談、漢詩の詠み合いによって台湾住民と交流をしてきた。初期の「国語」教育は対訳方式の教授法で行われた。日本人は自ら新聞、雑誌に漢文欄を設けた(『台湾日日新報』等)。台湾における漢詩グループが一番多く設立されたのは、日本統治下の大正期であった。1930年代、南洋、満州の漢人に

大東亜新秩序を宣伝するための道具となった。漢字漢文は権威財、知的生産財、教養の消費財としてだけではなく、統治手段にまで及んだ。半世紀に渡る台湾支配の間、漢文が姿を消すことはなかった。



5. 戦後台湾語文の発展とローマ字運動

第二次世界大戦後、日本に代わって中国国民党が台湾を統治し、中国白話文が国語となった。中国白話文の基準化、規範化がもたらされ、絶対的な権威となり、文体上の境界が明確となる。そのため、雑駁な植民地漢文は公から排除されることになった。

ただし、すべてが消滅したわけではなかった。60年代、日・台歌謡文化の類似性及び同類の社会変遷の経験に基づいて、台湾人は日本で1960年代の高度経済成長期に登場した「望郷演歌」をカバーし、台湾社会で流行させた。台湾語教育がない中で、50、60年代のレコードの歌詞カード、80年代以後のカラオケ用の台湾語表記は、台湾話文の延命に寄与した。

1987年に戒厳令が解除されると、民主化や台湾人アイデンティティの向上に伴って台湾語復権運動が隆盛した。80年代から90年代、台湾語運動の議論は、明確な台湾人アイデンティティに寄与する形で、台湾語と

台湾ナショナリズムが一体化していった。戦前台湾のナショナリズムは主に抗日を主軸にし、中国への憧れを養分としていた。それに対して戦後の台湾ナショナリズムは、台湾独立を目指すようになる。表音文字運動が再び息を吹き返した。

2000年台湾は戦後初の政権交代を実現した。台湾独立を掲げる民進党の政権下、表音文字は台湾語教育に導入されたが、順調にはいかなかった。その理由としては、①台湾語の講読テキストの不足により、表音文字が近代化知的ルートと連動しなかったこと、②台湾の歴史や文化遺産と繋がることのできないこと、③閩南語を基準する台湾語ローマ字表記によって客家など他のエスニックは台湾ナショナリズムから排除される危険性があったためであった。30年代の言語運動の問題点が、未解決のまま再登場する状況にあった。

6. 現代版植民地漢文の出現

「同文」、歴史文化、近代知的なルート、エスニック融合などに呪縛されて、「台湾語台湾文」は言文一致から遠ざかるかに見えたが、90年代のラップ音楽の流行によって、植民地漢文が蘇生の兆しを見せている。1990年代半ばから台湾にも台湾語のラップ音楽が流行し始めた。台湾語のラップ音楽の中に

は、台湾語のほかに、北京語、客家語、日本語、英語が混在する。漢字の表音文字性を利用し、多種の漢文を組み合わせて、その可視性の面白さを表現する。本来、規範化、標準化から逸脱し、戦後初期には低俗、ダサい、郷土風、演歌ぽいとイメージされた植民地漢文は、ラップ音楽の流行によって自然にユーモラスに、反体制的に、かつおしゃれな文体に反転した。植民地漢文はモダンなイメージへと転位すると、さらに歌謡曲の世界から文壇にも継承されていく(例:「宅女小紅」)。ここでは、1920年代の中国白話文のような「台湾国語」が忠実に表されている。不正確な発音を表す際、故意に面白い当て字を使うという変体や、台湾の歴史、文化、政治の状況を忠実に反映しているこの文体こそ、現在台湾人の日常生活に合った等身大に近い自らの文体であり、母語を中国白話文としない大部分の台湾人にとって、「言文一致」の実践といえよう。

日本及び中国国民党の重層的な「植民地」統治を受けて、台湾は漢字漢文の坩堝となった。東アジアの「同文」関係を利用し自らの文化を発展させてきた。漢字の混成化、表音文字化は「類似」を以って「差異」を表す道である。ここに台湾文化のひとつの自主性が表れている。

<コメントペーパー>

規範を作らず一見無秩序に見える文章表記が、異言語を用いる民族が共存し、外から入ってくる新たな思想概念を柔軟に受け入れることを可能にしたという事実は興味深く感じられた。同時に、そのような使い方を可能にする、あるいはもともとそのような使われ方のために生み出された感じが非常によくできたシステムを持っていると考えられる。(理 I・1 年)

これから台湾において、台湾話文が中国白話文の地位にとって代わることがあれば、それが台湾の人々のアイデンティティへと結びついて、最終的に台湾の独立へとつながっていくことは考えられるのであろうか。(文 I・1 年)

辞書に記されない歌詞カードの表記によって大きく影響されるような言語は、秩序だった学習の容易な言語が優れているという価値観のもとでは劣っているのかもしれないが、意思疎通が可能な点で最低限の役割は果たしているわけであるし、重層的で非常に魅力を感じた。(文 I・2 年)

日本で起きている言語の問題というと、日本語と英語の衝突によるもの、つまり外来語、カタカナ語の問題であるが、それが台湾の場合だと、植民地漢文、中国語、英語と、三重の衝突によるものであり、問題はより複雑であると感じた。(文 I・2 年)

まとめと総合討論

岩月純一、陳培豐、三ツ井崇、吉川雅之

第13回:2014年1月27日

(岩月) 今日はいくまでのテーマ講義のまとめとして、講義を担当した先生方にお集まりいただいて全体に関するディスカッションを行いたい。

はじめに、本テーマ講義の二つの主題を確認しておく。

第一に、現在は中国語、朝鮮語、ベトナム語、日本語、など各国にそれぞれの言語があり、皆がそれを話しているのが当たり前と考えられているが、そういう意識が当たり前になったのはそれほど昔のことではない。現在のよう形で安定してきたのは19世紀後半～20世紀初めのことであった。変化の時期には今の見方ではうまくとらえられないような多様性、混質性が存在し、どれが正しいのかよくわからない状態であった。本講義では、こうした状況を、中国、日本、朝鮮、ベトナム、台湾の視点から示していく。

といっても、それぞれの状況は決してバラバラにあったわけではない。時代を通して変化し、最終的には収斂していくように見える。そこで、こうした各国の状況をよりダイナミックな視点から捉えること、これが本講義の第二の主題である。

1. 漢文の多様性をめぐるダイナミクス

(岩月) 陳先生のご講義に出てきたように、台湾における植民地漢文とは、実際には非常に多様性を持っていたものであった。また、中国

語の中の多様性もある。その一つの例が、吉川先生の扱われた、香港で通用している書き言葉、いわゆる中文が中国語と違っているように違わないという微妙な状況であろう。これらの問題に関して、補足説明をお願いしたい。

(吉川) 台湾における漢文の重層性の方が香港の状況よりもやや複雑であるという印象を持っている。香港人が中文と称している言語と言うのは、書かれたもの、すなわち文字言語(書記言語)としては現代中国語に近い様相を呈する一方で、文言文(漢文)という様相を呈するレンジまで若干の幅を持っている。香港は中華圏の外縁に存在しているため、より保守的なもの、伝統的な中華が残りやすい。書記言語に関しては、文言文や白話文が使用される場面は多い。特に行政文書では(中国で使用されるスタイルよりも)文言文に近いスタイルが使用されることは現在でも多いし、尺牘(書翰)を文言文で書くための教材も書店で売られている。

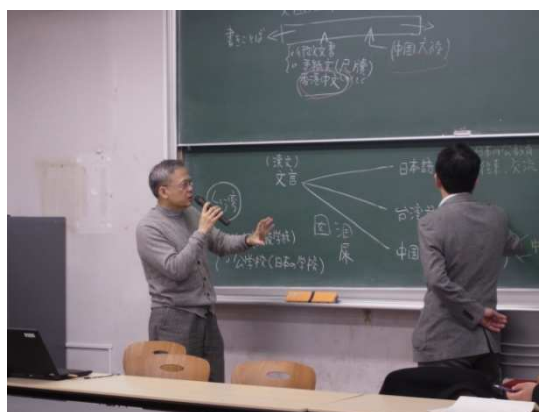
(陳) 台湾の状況はより複雑である。もともと知識人たちは伝統的な漢文を多く使っていたが、日本の植民地支配によって日本語教育が積極的に実施されていく過程で、和製漢語が入り込んだ。台湾人たちは、公学校に入れば和製漢語を履修し、他方で、書房において知識人たちが学ぶ四書五経、孟子等を媒介として

伝統的な漢文の教育が行われた。

その後、言語の近代化、とりわけ言文一致の問題をどうするのかという課題に直面し、台湾語は、書籍、辞書、学習書の揃っていた中国語白話文を真似していくようになる。

日本統治下の台湾人といえば福建からの移住者が主流を占め、彼らの話す言葉は閩南語であった。そうした中で、土着的な台湾語の要素を強く残した農村部と、北京語が流入した都市部の間で言文不一致が生じていくことになる。

また、台湾人が中国白話文を真似して書いた文字、すなわち「中国白話文」と、台湾語との対立も生じた。両者の明らかな違いは、「中国白話文」が文語体、近代化を担う言語として長けていたのに対し、土着化された言語である台湾語は、近代化、啓蒙化を担う言語としては無理があったことであった。しかしその後、お互いの弱点を改善するために、土着化された台湾語の中に多くの和製漢語が取り入れられ、中国白話文では使われない語彙、文法が入っていった(たとえば「積極的な」のように、漢語を形容動詞化するための「～的」は、中国白話文では「～の」という意味でしか使われないが、台湾語では日本語の用法がそのまま定着していった。このように、台湾語の成り立ちには、さまざまな経路、利用のされ方が影響を与えている。



2. 言語で言語を分析ということ

(岩月)さらに考えなければならない問題として、言語で言語そのものを分析することの難しさがある。「文言」、「白話文」、「台湾語」、「日本語」などの呼び名それ自体も、使う人側の立場によって異なる。たとえば、日本語についても、行政文書としての訓読文(「帝国漢文」)が台湾語に影響を与えて、日本では衰えていく漢文が「日本語」を経由して台湾で残るといった現象が生じた。

(陳)新聞紙面上では 1937 年まで、日本語の影響を強く受けた漢文で構成された「漢文欄」を設けている。

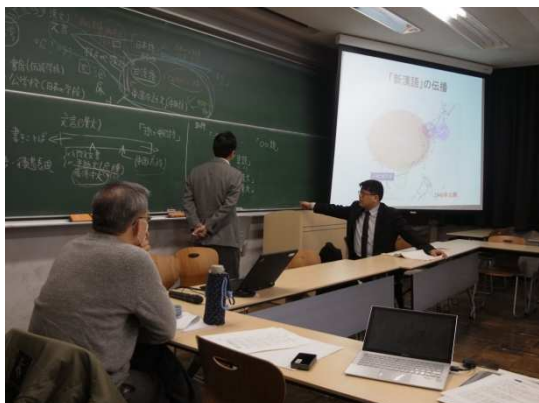
(岩月)これと比べると、日本、朝鮮、ベトナムについては、「漢文」⇔「○○語」という関係があり、そのあいだの境界が対立していくという構図が描ける。この境界をどのように線引きするのかについては、日本、朝鮮、ベトナムにおいてある程度共通するものがある。たとえば日本語の場合、江戸時代に使われていた候文は、手紙文であり、待遇表現(敬語)を持つが、より対等な立場で行う議論のためには待遇表現がない(少ない)文体を作り出さなければならな

かった。そこで、「中立的」な文体として盛んになったのが訓読体である。

(三ツ井)朝鮮の場合、15世紀以降でも、朝鮮語は行政文書のような公的な文書の中でもまれにハングルを使うことはあった。その意味で、公と私の領域性はあいまい部分も存在したと言える。

また、漢文といったときに「吏読」を含んでしまう場合がある。近代に至ってようやく、ハングルが公的文書の中に含まれていく、語彙的な意味を漢字で書いて文法的な助詞(吐)はハングルで書く「諺漢文」/「国漢文」があったが、それも漢文的な要素が含まれるもの、読み下していくものなど文体は多様であった。

さらに近代化の過程では、日本語の影響を受けて訓読の発想を持つ知識人も出てきた。また、和製漢語が大量に流入するようになると、国漢文で使っていた語彙、和製漢語の語彙をどのように調整するかという問題が生じた。漢字起源の語彙はそのまま残る。漢語だけではなく、日本の固有語(生活語)も朝鮮語のシンタックスの中に入っていく。どうやって日本語のものを朝鮮語にするかという国語醇化(純化)の問題が、植民地からの解放後から現在まで引き続き残っている。

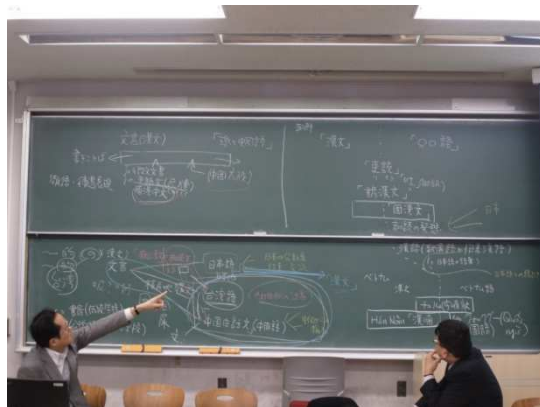


3. 東アジアにおける日本の植民地支配の影響

(岩月)いま三ツ井先生のお話にあったように、東アジア各国の言語には日本語からの影響も少なくない。さらに、日本自体も漢文の伝統を持っているため、それが日本固有のものか朝鮮や台湾の土着のものだったのかを線引きすることは困難である。

ベトナムの場合、漢文と見なされているものとベトナム語とみなされているものの境界に、チュノムが存在したが、現在のベトナム人にとっては自分たちが読めるローマ字表記で書かれたクオックゲーと、読めない文字で書いてある文字(漢字、漢文)をひとまとめにした Han Nom(漢ノム)とが対立しており、漢字とチュノムの差異は見えにくい。

このように、いくつかの対立軸を設定すると、それぞれの地域、時期で分かれていることが明らかとなる。しかもそれらは状況の中で変化する複雑なものであり、そこにある多様性それ自体も可変的なものとして捉える必要がある。



(吉川)台湾語と中国白話文との対立に言及するならば、香港における広東語と中国白話文(香港中文)の間でも同じような図式化が可能であろう。ただしいくつかの違いはある。第

一に、香港の場合は統治者階級の持ち込んだ言語が英語であり、そもそも文字種が異なったこと。第二に、台湾では日本という統治者が言語、文体をコントロールしようとしたのに対し、英国統治下の香港政庁は中国人の使用する漢文に対して放任主義をとったこと。そして第三に、広東語と台湾語は漢字で書けない語を多く有するという共通点を有する一方で、その文字化の方法が異なったこと。歴史的に台湾語は漢字の新造よりはむしろ訓読(同じ意味の既存の漢字を当てる)ことで対応しようとしたのに対し、広東語は漢字を新造していった点が大きく異なっている。その結果、台湾語と中国白話文の間の境界よりも、広東語と中国白話文の境界のほうが可視的であるという状況が生じた。

このように、中華圏における言語発展のプロセスには多様性が存在しており、今後の展開は現代社会に生きる我々の手にゆだねられている。

(岩月)ベトナムの場合は、ローマ字採用の結果、ベトナム語と漢文のあいだの境界がはっきり見られるようになった。

一方、中国語の場合には、「普通話」のなかにも、文語的な要素と口語的な要素のようなさまざまな差異が含まれている。

このように、土着の言語と書き言葉の間にはさまざまな微妙な差異が存在している。名づけられれば意識されるものだが、そうでなければ見過ごされてしまうことも多い。実はその中に差異があることを認識してほしい。



<コメントペーパー>

150年という短い期間の中で、こうもめまぐるしい言語的変動があるのが驚きである。動態的でありすぎるがために、何が正統か、正統なものが果たして存在するのか、大海の中に投げ込まれたような感じがする。(文 I・2年)

言語が歴史の流れをストレートに受けて、言語感のフュージョンが生じているように感じた。使いなれているから分からないのかもしれないが、ものすごく微妙なバランスの言語を無意識に用いている様子が興味深かった。(文 III・1年)

それぞれの地域の人々が母語、あるいは「自分たちの言語」と認識しているものと、日常的あるいは歴史的に使用しながらも、「他者の言語」の認識するものとの境界線を知ることは、その人々が言語に関して何を重要視しているか、さらには自分たちの文化に対する見方を端的に明らかにしてくれるのではないだろうか。(文 III・2年)

編集後記

現在私たちが東アジアで使用している言語が、西洋と接触を強めた 19 世紀から 20 世紀初頭にかけての東アジア大の相互影響の中で、徐々に各国語へと収斂するダイナミズムに圧倒された。そのような言語変容の動きは、メディアの多元化によって現在さらに加速しており、その担い手は現代に生きる我々である。日本、中国、韓国、台湾、ベトナムという個の近代化と東アジアという全体の近代化を、言語を切り口として重層的に理解することができ、大変勉強になった。このような機会を与えてくれた先生方や EALAI のスタッフの方々に心から感謝申し上げます。

(テーマ講義 TA / 大学院総合文化研究科博士課程 1 年 新谷 春乃)

先日、調査のために初めて訪れた台湾で、私は、不思議な感覚を覚えた。自分には理解できない(はずの)「中国語」でのやりとりをぼんやりと聞いているうちに、会話の中に、「ターカーイ」という音が頻繁に登場することに気がついた。話の合間にこっそり通訳の方に聞いてみると、「ターカーイ」とは、「大概」を台湾方言で読んだ音であるという。言うまでもなく、日本語で「タイガイ」と読むあの語彙である。漢字語彙を音で読んだときのこのパラレルに気がついたとき、台湾の人々の口から発せられる「中国語」のすべてが、するっと、私にとっての身近なものとなったような気がしてきたのである。あれほど難しいと思っていた「中国語」が、ひょっとしたら自分にも、もしかしたらあと一息で理解できそうな「ことば」に思えてきたのはとても愉快的な経験であった(もちろん現実にはそれほどたやすくはないのだが)。ちなみに「大概」は、北京語では「ダーカーイ」、韓国語では「テゲ」となるらしい。ベトナム語では「ダイカーイ *đại khái*」と発音する。書き文字としての漢文脈の世界は、近代東アジアにおいて大きな変容を遂げた。その一方で、音がつなぐ話しことばとしての漢文脈の世界は、今日に至ってもなお私たちの暮らしの中に生き続け、私たちを区切ると同時に結び付けてもいる。

今回のテーマ講義では、近代東アジア世界において、漢語と漢文脈の世界のなかに生きてきた人々が、どのようにして他者とのつながりを求め、同時に差異化を図ろうとしてきたのかということ、言語という視点から学ぶことができた。そこから 100 年の時を経て、携帯メールやブログなどの IT 技術の日常化により、話しことばと書き文字は再び、大きな変化の波にさらされている。今日こそまさに、かつて近代の東アジア知識人たちが経験したことばの接触と変容のプロセスについて考え、その経験と工夫を学び、未来に活かしていくことが必要であろう。

(EALAI 特任講師 伊藤未帆)

協力者一覧

(五十音順)

■ 担当教員 Professor in Charge

岩月純一 IWATSUKI Junichi

■ テーマ講義 TA Teaching Assistants

新谷春乃 SHINTANI Haruno

■ EALAI 特任講師 EALAI Assistant Professors

伊藤未帆 ITO Miho

齊藤良子 SAITO Ryoko

■ EALAI 事務補佐員 EALAI Assistant Clerk

岩田以都子 IWATA Itsuko

■ 報告書編集 Editors

伊藤未帆 ITO Miho

新谷春乃 SHINTANI Haruno

2014年3月31日発行

東京大学

東アジア・リベラルアーツ・イニシアティブ (EALAI)

TEL : 03-5465-8835

contact@ealai.c.u-tokyo.ac.jp

<http://www.ealai.c.u-tokyo.ac.jp/ja>